

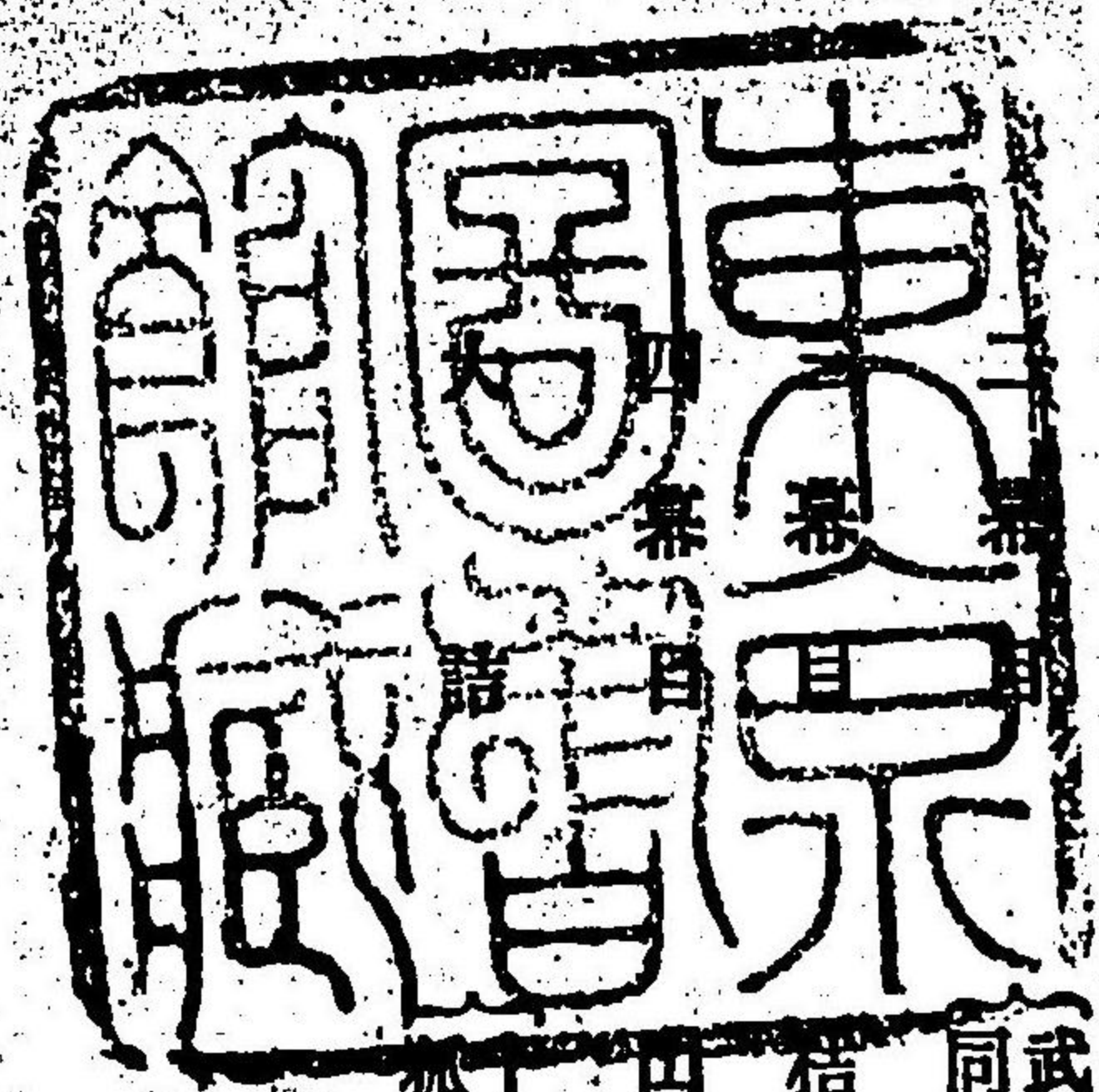
中西貞行著作

演劇  
脚本  
本朝廿四孝

自大序  
至大詰

特51

674



阿波本朝廿四孝

序幕

割

諏訪明神賽錢箱の場

武田信玄館の場

同奥座敷の場

結梗ヶ原の場

山本勘助住家の場

種火香の場



演劇本朝廿四孝

序 幕 諏訪明神賽錢箱の場

役 名

一 道 樂 者 横 藏	一 車 使 勘 八
一 腰 元 濫 衣	一 同 九 介
一 車 使 比 養 作	一 齋 藤 道 三
一 板 垣 兵 部	一 仕 出 四 人
一 落 合 藤 馬	一 家 來 大 勢
一 車 使 比 權 六	

遺物少し上手寄りに本様附の神殿扉を開き此向ふ戸帳を見せあり扉の所鈴の緒後に引らるる事あり此前賽錢箱をすへ上手前へ寄せて莫大なる石此下より人の出る事あり下手石の手水鉢奉納手拭を掛け此下手に因果車すつと下手敷疊後山の遠見空より松の釣枝都て諏訪明神の体爰に仕出し大勢好みの拵らへにてお百度をふみ居る此見得唄神樂にて幕明く「ト仕出し捨臺詞宜しくあつて向ふより養作好みの拵らへにて車を引き出て來り」養作「今

日は諏訪の明神様の卯月の宵宮トレお参りして歸らうか「トいひながら舞臺へ來り皆々を見て」養「オ、そこに居るは皆近在の知つた者太郎も次郎もよう参つたなア」○「オ、養作か遅かつた」○「今日は明神様の宵宮であつて」△「皆もかうして参つて居るのに」×「わりや何所へ往て居たのじや」四人「不信心なやつじやなア」養「イヤさうじやなければおれも上諏訪迄油かすをつけて往て今歸りじやがはつこりと草臥果た」○「草臥たら歸つてお神酒でも頂けやい」○「おれも一所に」四人「附合はう」養「イヤおれはちつと休んで跡からいさう皆よ先へ遠慮なしにいんでくれ」○「ア、草臥た」ト「ト上手の大石に腰をかける皆々見て」○「コレ養作其石は明神様の力石とて其石は腰をかくれば其をるらい石を上げねばならぬといふ事は」○「わりや知らぬ事」四人「餘もあるまいがの」養「オ、ろりや知つて居る知つては居るが神は見通し見て見ぬ振りちつとの間は大事もあるまい」○「うんならおれ等は先へいぬるによつて」○「あんまり長休みして見附けられぬやう」△「ちつと休んだら戻つて來いよ」×「後に一盃身祝ひやらう」養「直ぐに跡からいぬる」四人「そんなら養作」養「皆の衆」四人「サア行う」ト「唄神樂になり四人橋掛りへ這入る上手より勘八九介權六車遣ひ悪者の拵らへにて出て來り養作を見て」勘八「ヤイそこに居るのは」三人「養作じやねへか」養「オ、誰かと思へば車遣ひの仲間の衆」勘八「わりや此神前の力石の事」三人「知つて居よう」養「本にさうヒ

やたつた今も村の衆がいふたけれどあんまり辛度さに忘れてひよつと 権六「イヤ忘れたとはいはれまい昔から當社の習はし腰をかくれば叶はぬ義作 葉「叶はぬとは 勘「チ、権六がいふ通り其石を上げい 葉「エ、どうして此大きな石がわしが力で上げられうぞ 九介「そんなら宮へ断つて明神様のお神酒代を上げるか 葉「夫のどうも 權「出来ねば石を 三人「上げて見る」ト義作思入あつて」 葉「ア、コソ皆の衆知つて居ながら腰かけたはおれが鹿相二人三人かゝつた地地ばなしもならぬ力石をどうぞ皆が沙汰なしに下内で 權「イヤ濟されぬわれが石をよう上げねば宮へ引きつて行く 勘「さうじやく日頃から女たらしして生しらけたしやつ面 九「踏にじつてこませ」 葉「そんな邪見な事いはずと堪忍してくれ」 權「エ、ぐすくぬかさず 三人「早うせう」ト三人して義作を引立ようとするを義作行くまいとせぢうう内能き程に上手より板垣兵部羽織袴の袴らへにて家來を連れ出掛り様子を聞居て」 板垣「ソノ家來共引分けい 家來「ハア、○争ひ無用静まれ」 權「夫でも 三人「こいつを 家來「ハテお旦那のお差圖じやぞ 三人「何お旦那とは」ト見て」 三人「へい眞平御免被成て下さり升せ」ト皆々叩へる」 板「始終の様子は聞たるが社法を背さし不届奴併し慈悲第一の御神なれば法に行ふにも及ぶまじ爰は身共が義作とやらんに成替つて詫致す 葉「段々どの御情の程有難う存じ升る 板「コリヤ若い者共侍が詞を下げる了簡の致して取らせい 權「サアお侍

の詫びなれば了簡仕度いものなれど 三人「夫ではどうも宮の掟が 板「サアそこがあるに因ての詫身は武田信玄の家來なるが畢竟わいらは義作が訴人なれば我領分へ連歸つて科に行ふ 三人「夫では酒手の三文には 板「何と申 三人「イエ折角の事なれども 板「了簡はならぬと申う 三人「どうぞお構ひ下さり升るな 板「ふ、了簡をらすば身共も武士斯くなる上は言分あるぞ」ト急度なる三人恠りなし」 權「ア、申々何もお顔を立ぬと申のではムり升せぬ勘「折角お武家様が口を利ておくんささる事なり 九「夫程にかつしやる事だから宮守りへは沙汰なしに致し升せうと 三人「へい申ておるのでムり升る 板「然らば言分はないと申な 三人「へい左様でムり升る 板「コリヤ義作とやら聞く通りのしぎなれば最早安心致してよいぞ 葉「へい」トまた様のは存じ升せぬがお詫び被成て被下升て有難う存じ升る 板「イヤ其禮には及ばぬ事其代りには其方へちと頼みたい事がある旅宿迄来てくれまいか 葉「是はくゆかりかゝりもない私お詫びなされて下さり升て忝うムり升る假令さうなくともお侍のお頼み身に叶ふた事ならば何なりとも御用の子細爰にて仰せ下さり升せ 板「チ、夫と過分去りながら爰は社内參詣も多ければ身が旅宿へ同道して密々に談したい 葉「子細は何か存じ升せぬぞさういふ事ならお供して 板「事に寄らば隙取らうさう心得て太義ながら運んでくりやれ 葉「何が扱御恩の旦那様のおつしやる事何所迄も 板「来てくれうや重疊」

家來共養作を同道せい 家來、ハッ畏り升た 飯然らば養作 養、旦那様 家來「サアお出被成  
 升せ」ト板垣先に養作車を引き家來附添ひ向ふへ這入る三人は跡を見送り思入れあつて「  
 横」エ、思々しいアノ養作めをゆすつて酒買はさうと思ふたに 勘「さうよいはれぬおさぶが  
 挨拶で骨折損 九「モウ此上は高井前で目で一盃やりかけうじやないの 横「サ、夫がよい  
 兩人「サア来い」ト上手へ這入る向ふより濡衣腰元好みの拵へにて出て来る戸家の内に  
 て「横」チイ姉さん待つた」ト横藏箱のどてらの拵らへにて呼びながら出て来る「濡衣  
 「呼ばしやんすは私の事でムんすかいなア 横「さうじやさつさから呼んだは姉さんお前の  
 事じやお前も諏訪の明神へ参る人と見たのじやがふれも明神をせぶりに来たお百度の連れ  
 にありやんしよ 横「是はマア」トどなたか知らぬが幸ひな道連れモウ日が暮れかゝつて心  
 細いよいお方にお目にかゝり升たわいなア 横「さうであらう」サア行やんせう」ト舞臺  
 へ來り宜しく祈念する事あつてお百度をふみにかゝる「横」チイ」お前もマア日暮から  
 來るとは大膽な術妻様じやマアしんどか手を引うかへ 横「ハテしんどいとして大事のお願  
 ン身をこらさいでよいものかいなア 横「よ、身を凝らすとは戀であらうな 横「イエ」そ  
 んな事じやないわいなア 横「夫なればよい着物がほしいといふ願」でさいかや 横「何の  
 マわつけもさいさういはいしやんすお前の願」へ 横「おれが願は商賣の四つは此間腐り續

けさし斗りにあつたから思ひ附きの百度参り〇如何様姉さんの足の輕さはよく」の願ひ  
 と見へるがマアろろ」歩いておれがいふ事を聞つしやれ色事でなくばおれとはさうじや  
 横「エ 横「味の腰附さじやなア」ト濡衣の腰をちよいと叩く」横「ア、コレ大事の」お百度  
 に悪魔をさして貰ふまいわいなア〇耳に諸の不淨を聞て心に諸の不淨を聞かず拂ひ給へ清  
 め給へ」ト塵手水を使ふ」横「こりやけうとい神道使ひ堅い所が奥床しいコレ神様は粹じや  
 ツイ叶へ給へ靡さ給へ 横「アレてんがういはすと祈念仕なさんせいなア 横「サ、しんどや  
 横」佛の顔さへ三度といふに神様のお百度は足も腰も抜け果たドレちつと休まうか」ト上  
 手の大石に腰を掛け休息のこなし濡衣一人お百度を踏み仕舞神前へ來て宜しく拜む事あつ  
 て」横「大願成就なすしめたまへ諏訪明神様」ト鈴の緒を引く是にて鈴の緒切れて落ち  
 る濡衣思入あつて」横「ヤ、コレヤ鈴の綱の切れて落ちたは」ト心がりのこなし横藏傍へ  
 來て」横「コレ何とさつしやつた姉さんさうさつしやつた 横「さいなア私がお百度は大事  
 の」お主様の命乞夫に鈴の綱の切れたのはれ命のさいといふ明神様の知らせではムんす  
 まいかと思へば 横「ハア氣の弱い流石は女子」〇「ト鈴の綱を取上げ見て」横「コレあなた  
 の命乞するお主といふは男か女か 横「アイ殿達でムんす 横「夫なら言左右此鈴の綱に書てあ  
 るは十七歳の男息災延命とあるからは神も納受に違ひないぞや 横「夫はマア」お嬉しや

お主のお年も丁度十七 横「此鈴の綱を持っていんで載せてやらしやれ 落「ア、成程よいお方にお目にかゝつてお命乞の願成就御縁もあらば此お禮に横「そんならモウいなしやるか 落「お先へ歸り升わいなア」トいそくと勇み立向ふへ這入る横藏跡を見送り」横「餘所はない命でさへ神の納受で生るのに生る事は扱置と胴取りや腐るはればかゝれるモウ今夜の元手ががない〇、是から明神をおれが仲間の胴頭にして此箱の賽錢を胴錢マア試みに神様を相手にして三つばの廻り仕て見よう」ト賽錢箱を前へ持出し賽錢をふりうつし」横「チ、さくで是程あれば今宵の元手ならくじや」ト懐より綱の財布を引出し此中より骨子を取り出し」横「サア、神様うらふらしやり升せ」ト捨臺詞にて自分一人骨子をほうる事あつて」横「サアしてやつた」ト賽錢を我前へかき寄せ」横「神様もモウ一文なし是からは拜殿燈籠神樂太鼓何なりと形を見ねは錢かさぬ假令貸しても正直をおもにする神様ならば餘もやぶさは打しやるまい負けたと思ふて神腹を立さしやんか全く我等が賽は使やせぬイヤ、ハヤどういふた迎へんぞ」ト打しやれぬ結構な神様じや」ト賽錢を財布へ入れ」横「コレ盗みやせぬ相對づくで勝た錢勝次手に何なりとせしめてくれうか」ト見廻し」横「チ、幸ひのあの太刀」ト思入あつて堂の上へ上り奉納の太刀を持ち來り」横「チ、是は幸ひ一元手じや」ト向ふへ行うととる此以前上手より落合藤馬好みの拵らへにて家來大勢連れ出かゝり

様子を窺ひ居て」落合「ソレ家來共 家來「ハア、」トハラノと横藏を取巻く横藏思入あつて」横「こりや私を何とささる、落「チ、最前より窺ふ所御主人の奉納の太刀盗取るには子細ぞあらん 横「見附られたら百年目じや 落「白狀させん〇ソレ 家來「細にかゝれ、横「何を小瀬な」ト立廻りあつて家來叶はずなる落合刀を抜て切てかゝるを一寸立廻り横藏奉納の太刀にて振打に落合の首を討落せ」家來「彌々狼藉」ト又かゝる宜しく立廻りあつて横藏皆々を橋掛りへ追ふて這入る上手より長尾景勝野袴鞭先の拵らへにて出て來り」景勝「合點の行のぬ今の太刀音ハテナア」トいひながら切首を見て思入あつて取上げ」景「コリヤ是家來落合藤馬が首〇、」ト思入橋掛りより横藏血刀を持ち出て來る是にて景勝後ろへ寄り様子を窺ひ居る」横「心がゝりは以前の首其儘置ては後日の邪魔、さうじや〇」トあたりを捜す事あつて」横「今一刀に討落したる首の爰にあらざるはハテ面妖な」ト景勝前へ出て」景「汝か尋る心の一品某拾ふて爰にあり」ト首を出す」横「ヤ 景「何とそちに覺へがあらう 横「ム、」ト橋掛りより以前の家來ハラノと出て」〇「奉納の御太刀を盗み落合殿迄殺せし曲者最早遁れぬ 皆々腕廻せ」トかゝらうとする」景「コリヤ者共待て」ト眼前の家來の敵身が手にかけん」ト急度横藏を見て」景「落合藤馬が首討たる手の内といひ多勢を相手に薄手も負はぬ力量を持たながら盜賊と聲をかけられ刀を投出し誤り入りたる面附きはま

んざら理非の辨へないやつでもないユリヤおのれ出来心じやな武士の家來を手にかけしに  
 つくい盜賊只今是にて成敗致す○奴なれども命は助けた 横エ、長尾三郎景勝身が手  
 を下ろして討つべき首は天下に一つか二つおのれ如きに目はかけぬ 横スリヤ御赦免下さ  
 るか 景此社に一七日參籠の大願未だ満たざる内なれば一命を指赦るす 横有難うムリ  
 升る 景餘人に斯様の狼藉せば忽絶命面魂に見所ある奴性根を改め其首の胴に附てあるや  
 うに慎みおれ 横委細心得てムリ升る 景去らば「ト思入あつて家來を連れ向ふへ這入る  
 横藏跡を見送り思入あつて」 横ア、ひやいな事命一つ拾ふた是から博奕場へ往たども此  
 ふさんでは罫が明くまい一服のんでいんでこまろ「ト大石に腰をかけ燧を取出し火を出し  
 て煙草をのみ居る能き程に以前の權六勘八九介上手より出て來り横藏を取巻き」 横「ヤイ  
 わりや此力石の法を 三人知つて居るか 横「チ、知つて居る 三人何ぞ 横「此石を上げる  
 覺へがあつて腰かけたが何とすりや 横六「アハ、おのれに千手觀音の手があつてもな  
 らぬ」 勘八「夫程此大石を上げる程の覺へがあれば 九介「おいらが相手になつて見よ 横  
 爰で力を三人ためしてくれるは「ト両方の手を捻上げる」 横「エ、甘い事をすなや」 「ト三  
 人を一時にはね退ける是より宜しく立廻りあつて三人叶はず橋掛りへ逃げて這入る」 横  
 エ、弱い奴等が力石くと仰山にぬかせども手懸程な此小石まつとあつたら上げるのを見

せうに「ト手をかけ大石を上げる此石の下切穴にて是より齋藤道三胡麻盪の長髮異形の拵  
 らへ蓑を着笠をかざし出てすつくと立つ横藏ぎよつとして石をそつと下に置き 横「ハテな  
 ア石を退けると現れ出たは下界の人か仙人か何とも以て訝かし」 道三「チ、我も同じく人  
 間なり汝が力量見届けたサ此一卷に血判せい 横「よ、此地の底を住家にして人をためす心  
 の底問はねぞ知れた大望ある人品よつたら頼まれ升せうが此横藏も其元様の器量を見立  
 て頼み度事がムリ升 道「ホ、ウ小ざのしくも申たり主従は一牀主は家來を頼み家來は主を  
 頼む習ひ汝が頼みの子細は如何に 横「則是に「ト懷中より一卷を取出し」 横「老人是も血判  
 がして貰ひたい 道「ハテ思ひ合ふた此頼み汝も 横「御邊も 兩人「替らぬ大望」 「ト兩人思入  
 あつて」 道「身は其方を家來にする氣 横「身共は御邊を家來にする氣ぢぢらへどう共決せ  
 ぬ内は 道「胸中を卷込だ此一卷滅多には打明けられぬ 横「此方逆も此胸の内開かぬ内に返  
 事が聞たい 道「身が返答より其方が住所は何國夫聞たい 横「イヤ只野山を住家とすれば住  
 所とは定らず留る所は天が下 道「よ、面白い」 横「有家は聞かずとも一旦我目にかいつた  
 上は雲の内でも尋ね搜し味方に附けるは折りがあらう 横「天が下を志す汝が望みも某と同  
 腹同性 道「我も定めぬ旅の空志と方は六十餘州雨舎りする天が下人目を凌ぐ雨具をくれん  
 「ト蓑を脱ぎ」 道「七重八重花は咲け共山咲のみの一つだになさを悲しき○重ねて逢とう」

ト箒を投げてやる」横ト、適錢別受け升た手前も寸志の置土産返辨申す」ト力石をぐつと引上げ投附ける道三手際に受留め」道「儲に落手」ト大石を下に置く横藏は箒を振るを木の頭道仕る横去らば」ト横藏箒を着双方思ひくくの思入此模様宜しく詠らへの鳴物にて拍子幕

二幕目 武田信玄館の場 奥座敷の場

役名	姓	職
一武田 信玄	一百	主
一武田 勝頼	一奴	掃兵衛
一奥方 常磐井	一同	角助
一腰元 濡衣	一駕	身
一村上左衛門 義清	二人	人
一板垣 兵部		

造物三間の二重舞臺見附金襖上手折廻り塗骨障子屋体下手屋敷網代扉跡へよせて淨るりにて幕明く淨死は武士の常ぞとは常の詞と思ひ子に今ぞかゝれる甲斐の國武田入道信玄と

身は釋門に入ながら武門花咲庭の面落葉角助掃兵衛が引する箒打つ水にいと館はしめやかなり」ト跡白離しに成ると奴兩人掃除して竹箒切手桶杯持つて一段に腰かけ乍ら」無何と角助何かは知らず昨日から一家中がひそくと夜の目も寐ずに走り廻る其譯を何だと思へば京の大將義晴様とやらを誰とも知らず殺したげな夫で國々の大名衆がイヤ〜たりや殺さぬ知らぬといつて潔白を立られたげなそこでおらが旦那も其潔白を立てるといふて夫で館が騒ぐげな角其潔白といふものはどんぢものだそちや知らないか無何だ潔白をわりや知らないかイヤ此奴文盲な奴ではある潔白を立てるといふはおらが小半酒を立てると同じことで潔白ふれまふというてお大名には節々有る事角おらもちよ〜潔白喰つたが中々輕くつて味いものしたか餓汁と同一事であてらるゝと命がないわいらも命が惜しいなら誰が潔白を立てい共必ず喰ふなよ淨と物職り自慢とつても付かぬ下々の咄も物の知らせかと戻りう〜りし濡衣が聞て案じる胸撫下るし」ト此時濡衣橋掛りより戻り奥へ行のけこなし有つて」無「コレ〜二人りの衆下としてお上の取沙汰わしが聞ては大事なけれど若し侍衆の耳へ入たらこなた衆の爲にならぬぞや掃除が済んだら勝手へムつて休息さしやんせ淨と聞て恠り天窓角助とちめんぼう無おら何んにも白洲を掃兵衛」ト箒をかたげ這入る」淨箒をかたげて逃げて行く無よしなき事に隙取りて應奥様のお待兼濡衣只



今歸り升た 淨「一ト間に向ひかどなふ聲 常盤井「オ、濡衣か嘸や苦勞で有たの 淨「障子開いて常盤井御前思ひなき身の思ひ子を思ひ詫びたる御氣色濡衣こなたに手をつかへ 淨「上々様には苦はない物と思の外勝頼様のお身の上降つて涌たる御災難お案じは理り乍ら達者なお身でも有る事かお目の悪い若殿様もしもの事が有るならばと思へば身も世もあらぬ悲しさ悲しい時の神祈りと諏訪明神へ参りしも今度の御難義免がれさしたび給へと重き願も叶はぬ告げか切れて落ちたる鈴の綱思はずはつと取上げてよく見れば勝頼様の御年に違はぬ命の釣緒十七歳の男息災延命と書て有りしも神のお告と嬉しさ餘る鈴の綱是れ御覽遊ばし升せ 淨「是れ見給へと取出し見せるも見るも打ちにつこり 常「オ、夫は嬉しや悦ばしや切れて落ちしもなたの眞實神も納受まし〜て勝頼が身にさゝわりない諏訪明神の御神託是に付ても京都の武將義晴公何者とも知れず飛道具を以て害せしより諸國の大名心まぢ〜我人心疑ひ合ふ中にも夫ト信玄に疑掛る身の言譯一子を斬つて出すべしと契約ありしは武士の意地されども御前のお情にて君三回忌の其中に敵の所在知らるゝならば勝頼も助けよと深き恵みのたつ月日はや三回忌も事濟めど今に於て敵も知れず今日につゞまる我子の命何と詮方なき中にノウ持つべきものは忠義の家來板垣兵部我を招きお氣遣ひ仕給ふな勝頼公に寸分違はぬ御身替り兵部が存じて罷在れば今日中に連れ歸らんと館を出し

が妾が樂しみろれ故兵部の歸りを待て共昨日にも昨夜にも今に於ていなせのないが心掛りにありつれど神の御告げに何疑ひ兵部の歸りも頓がていあらうなたも案じやんかコレ濡衣 淨「と御悦びの折柄に「ト向ふより觸込み」ふれ込御上使 淨「と聞いて奥方涙ながら 常「甲はや御上使の御入りとや心當の兵部も歸らずハ、イヤコレ濡衣なたは次へ行て休息しや上使への返答は自が胸にあるサア行きや 淨「ハアイ 常「ハア立ちやいのう 濡「ハアイ 常「立てといふのに 淨「仰せに否とも濡衣が是非なく一ト間へ立て行く「ト濡衣思入有つてしいはりとして奥へ這入る」 淨「跡へのさ〜入来る上使は聞ゆる村上義清疊さわりも荒くれ武士いかつがましく出で来る「ト序の舞にて義清のさ〜と出て来て會釋する」 義清「上使なれば罷り通る 淨「上座へころは打通る奥方遙かに手をつかへ「ト序の舞にある」 常「甲斐と信濃は國並び其信濃にムつた村上殿今ハはる〜都より御上使とは御苦勞千萬に存じ升る 淨「といふに村上打點頭さ 義「成程以前は隣國のよしみ心安く致せしが夫は内証只今は上使の役目子細といふは餘の儀にあらす信玄疾くより合点の趣勝頼の首お渡し被成よ受取歸らん 淨「こともなげなる上使の權柄 常「成程其義は夫ト信玄妾又申付置さし故兼て覺悟は致し乍ら今はの際に是がマア悲しうなうて何と致し升せう親子此世の一世の別れ心用意も致させたい何卒暫時の御用捨を 義「首討に何の用意手間隙なしに拙者がたつた一ト討

に「勝」と立上るを奥方押といひ、當斯様申さば武士の身に有るまじき卑怯者未練者とも思はさうが何を包まん勝頼は諏訪明神の申子にて神に御苦勞かけ奉り設けし子なれば私に殺すも神恐有り勝頼が命元へ戻し奉ると諏訪明神へ代參を立たればせめてそれが歸るまで暫らくお待ち下さし升せ、勝「ヤアあまぢやいな其代參便々だらりと待つ事ならぬ、勝「イヤさのみ夫程にも隙取り升まいイヤモウ遅くて今日の暮迄に歸り升せうと存じ升る、勝「ヤア此永の日を待事は罷成らぬ、勝「然らば何卒未の上刻迄、勝「夫れも叶はぬ、勝「左様なればせめて二時の御用捨ハ、武士のお情けに、勝「イヤならぬ、勝「何卒一ト時の間を、勝「エ、ならぬと申すに、勝「スリヤ如何様にお願ひ申ても、勝「エ、くどいわい、勝「ホ、イ、勝「ハテ雑魚鱈を直切るやうに何のかのとどびつこい夫程延ばしてはしくば暫しの用捨致してくれん、勝「と庭に飛下り垣根の朝貞引みしつて床の間の花生へ捻込み押込み、勝「コレ朝貞の妻はむ迄宥免致して呉れる花が萎むと夫が寂滅、勝「と嫌といはさぬ割符の一ト本、勝「先づ夫迄は奥で休息御馳走には信濃蕎麥お手討が我好物花鱈より勝頼の首早く賞翫致したい奥方後刻、勝「左様ムれば義清殿、勝「御案内をお頼み申す、勝「イヤ奥の間へ御案内の致し升せう、勝「ふに否とも朝貞の日影待つ間の命ぞと思へば胸も板垣が早う戻つて呉れかしと、勝「キリ／＼案内、勝「ハア、勝「それを心の力草村上誘ひ常盤井は一ト間へこそは、「ト跡を

序の舞にて義清思入常盤井愁のこなしよて、兩人宜敷奥へ這入る、「勝「入にける始終の様子物蔭にて聞て袂も濡衣が今は恨を朝貞にいはん方を愛さ身やと聲をも立てず忍び泣洩隔たる唐紙を明ても明かぬ目なし鳥無慘なりける姿も、武士の角立角前髪袴の裾も長廊下探ぐる刀の手前さへ面目もさき其風情、「ト勝頼探りながら刀を杖に出て来る濡衣走り出で來り、「勝「ソウ勝頼様のおいとしやなア、勝「と頼り付て泣居たる、勝「悲しいは道理／＼只因果ある我身の上たま／＼弓馬の家に産れ弓矢打物取る事さへ叶はぬ片輪と成下り此儘無念の死をせんより侍らしう腹切るが弓矢神への身の言譯此頃母の物語其時覺悟は極めては居れど片輪に成ても子の命助たう思召す母上のお心づかひ無下に成すが勿体なさに今迄命延はれ共今村上が使者の様子聞てはさうも生てはゐられぬ目かいは見ぬ勝頼を大事に思ふて長々の世話イヤいかい苦勞をしてたもつた嬉しい共過分共禮は未來で／＼、勝「と跡は得云はず見へぬ目に涙を隠すいじらしき濡衣わつと聲を揚げ、勝「恨らめしい勝頼様此お館へ御奉公に來初めた日からお姿を可愛いらしと思ふたが縁と因果の初めにてお主様共御主人共辨まへ知らぬ拙ない筆で、勝「心のたけを岩本の神の結ぶのお情に嬉しい枕かはした時、勝「未來までもどかつしやつた其お詞が誓紙ぞと、勝「楽しんでゐるものを、勝「おまへはつかり死なうとは酷いつれない胴慾なエ、胴慾でゐるわいなア、勝「我身をとんと勝頼の膝に打

伏し泣沈む 鬨、其根は尤なれど親の赦さぬ徒らなればどうで果敢なき花の縁も朝貞も委む時分隙取つては耻の耻泣かすどろなたは次へ行きや 鬨「早切腹と見へければ 鬨」ア申し、まだ朝貞は委ばみは致し升せぬわいおアア、いき、と今を盛りのおん身の上切腹とは情けないどうぞ助かる仕様はムリ升せぬかいなア 鬨「留めて留せらぬせり合ふ中へ母は駆け出で 鬨、様子聞て覺悟は理りながらそなたを助けやうばつゝありに心を碎いてゐるわいのう母が心を無にするか 鬨「ハア、這は勿体ない御詞須彌大海に比べても及びがたなき母の感恩さら、無下よ致さぬ朝貞の限りの命隙取ては使者への手前 鬨「イヤ苦しうない大事なあなたに寸分違はぬ身代り借に有りと板垣が館を出しは昨日の朝もう戻るに間も有るまい 鬨「イヤ申し奥様板垣殿が其身代り連れて歸へらつしやれば勝頼様のお命にさ、はりのなければもし又違た其時の 鬨「夫も分別してゐいた濡衣うちや勝頼と不義してゐやうがな 鬨「エ、 鬨「イヤ呵るではない此母が今改めて女夫にする 鬨「エ、スリヤあの賤しい私を 鬨、賤しうても貴とうても女は夫トを太切に思ふが直ぐに氏系圖目かいの見ぬ勝頼を身に替へて大事がる如才ない氣を見込んだ故大事の子なれどろちに預ける連れて此家を立退さや 鬨「思ひがけなき詞に悔り 鬨「アノ勝頼様を 鬨「合点がいつたか花が委むと悲しい別れ早う行きや 鬨「いふ中もしや朝貞の妻れやせんと延び上り見や

る花より見る母の委萎る、斗りなり勝頼は氣色を正して 鬨「エ、怪志からぬ母人の御仰せ死を恐れて館を出なば後の嘲けり家の耻辱武士の命は義によつて輕しと申す只始めよりなき身ぞと思召歸らめて命のお暇給はらば猶此上のお慈悲お願申奉る 鬨「と命惜まぬ健氣さにいとせき來る涙を押へ 鬨「スリヤ此母が是程に心を碎くに承引せず腹切るかもう此上は留めはせぬそちより先に此母が 鬨「マア、お待下され升せ 鬨「そんなら落ちてたもるか 鬨「サアそれは 鬨「サア自害をしやうか 鬨「サアそれは 鬨「落ちやるか 鬨「サア 鬨「サア、是程いふても落やらぬかチ、さうじや 鬨「と差添をおつとれば慌はて留める濡衣に又取鎚る無惨の盲目 鬨「申し母上段々わやまり入り升したお詞に従ひ此館を落升る 鬨「スリヤ聞譯て落ちてたもるか 鬨「ハッ落升るでムリ升る 鬨「濡衣も落ちてたもるか 鬨「アイ、落升る必ず聊爾遊して下さり升るな 鬨「ホ、ウ聞譯けてさへたもれば母も嬉しいわいなアサ、斯ういふ内も心がせゐる、サア、早く落てたも 鬨「と勧められ是非なく、も立出れば一ト間の中より村上義清 鬨「ヤア勝頼を落さんとはのぶとい工三村上が見附たから一寸も動かさぬ爰へ引出して一ト討に致して呉れん 鬨「駆けよる先に立塞がり 鬨「コレ、朝貞の妻まぬ中に討たうとは 鬨「ヤア委ばまうが委ばひまいが脈のわがつた死人花 鬨「朝貞の花を目先へ突付け、 鬨「是でも生きるか生けて見るか 鬨「突付られて常

盤井も何と詮方なき身ぞと思ひ切つて突込む刀ノッ悲しやと叫ぶ濡衣驚く母 馬「ヤア御切  
 腹遊ばし升たか 馬「ヤレ早まつて生害しやつた 馬「右と左りに取り付て前後正体泣き沈む  
 勝頼苦しき息をつぎ 勝「申し母人お詞に背きし段眞平御用捨下さるべし是迄の御養育御い  
 つくしみ深かゝりし身の盲目の淺間しや軍慮に秀でし家に生れ戦場の駆引叶のき遠矢は元  
 より打物は漸うく刀を杖に突き我家の内を探ぐり廻る 馬「甲斐源氏の嫡流たる武田四郎  
 勝頼といはるゝ是が武士か 勝「よくく武運に尽き果てし我身ながらも愛想が尽き今日や  
 切腹明日や自害と毎日く刀に手は掛けながら思へば深き母の大恩我先立なばなき跡よて  
 嗚御歎お物思ひ逆様ながら追善供養 馬「受る不孝の勿体なく長らへ有りし今日只今親子の  
 縁も朝貞と俱に散り行く御名殘 勝「コリヤ濡衣我最期を歎す共母に力を付け奉れさはいへ  
 目かいの見へぬ身を朝夕心の樂みにくらしたるちが不便さあア 馬「涙吞込む手負の苦しみ  
 見るに悲しき濡衣が 馬「ツイ仮初のお障より見へぬ御目を明暮に苦に病み給ふがおいとし  
 くどうぞお目の明様と御符お札も有らゆる神既参りのお百度にも叶はぬのみかお命迄今を  
 限りと成たるは神も佛もあい事かいなア 馬「くさ立れば奥方も 馬「かゝる愛さ目を見ま  
 い爲心尽した甲斐もなう今に歸らぬわの兵部思ふに違ふ浮世じやなア 馬「手負にひしと抱  
 き付き泣涕こがれ伏沈む 馬「ヤア聞き度くもあいよまゝ事早々首を刎ねて呉れん 馬「刀す  
 らりと抜き放せば 勝「イヤ御上使 馬「言ふにや及ぶ 馬「コレマア待て下さり升せ 馬「エ、  
 面倒な 馬「ノウウ今が別れかいのう 馬「問へる奥方濡衣が歎きとむを突退け押退け村上が  
 振り上げる刀の下 勝「イヤ 馬「手負の合掌 馬「覺悟致せ「ト刀振り上げる常盤井濡衣止め  
 る勝頼覺悟して首さし延べる義清急度なる雙方引張り宜敷返し

造物三間の二重舞臺上手塗骨障子家体下手落間宜敷所に枝折門網代扉前側障子後ちに引扱  
 くこと宜敷送りにて道具留る 馬「ばつしり建切る生死の境斯かる事とも白洲の内怪しの辻  
 駕 駕算〇「エッサッサッ 馬「跡に續いて板垣兵部老の心もせき立つ足元 〇「ヤレく滅  
 相な旦那殿 〇「マア一里じやマア半道じや 〇「急げくと息もさせず上の諏訪から十七八  
 里夜通しの早追 〇「極めの駕賃お心附はお心次第結構さうな旦那殿 〇「酒手も定めし結構  
 なお金 二人「すつしりと下さり升せ 馬「汗押拭ふ其内に兵部は切戸のかきかねしつかり 兵「  
 駕代も呉れう酒手も呉れうこなたへ來れ 馬「やり過して大袈裟切ノウ悲去やと逃出す相肩  
 眞二ツ二人りを仕留める刀の音に胸り驚く駕の垂明けて逃出る義作が 馬「ア、申さく私  
 は御領分に住む百姓博奕はうたす喧嘩は嫌ひ成敗にあふ科はない御赦るされて下さり升せ  
 馬「齒の根も合はす慄るひわる 兵「ア、音高しく御身の上に氣遣なし必ず願を給ふな 馬「  
 座敷へ件ひ窺ふ中奥方「ト間を轉び出で 馬「跡は涙に取亂す 兵「ホ、ウ

應御待兼併し御用の品も首尾能く調ひ只今同道御悦び下さるべし奥様申し常盤井様  
 へぞいらへも泣入る母 兵「ハテ心得ぬ御有様何にもせよ委細の譯けもかつしやらす泣てム  
 つて事済むか勝頼様は何處にムる 義「ナ、其勝頼様に會はしてくれん 淨」と首引提げて立  
 出れば 兵「ヤアこりや若殿の御首スリヤ早御最期遂げられしか 淨」はつと計りに腰も抜け  
 胸も張裂くうろく眼 兵「拙者めが心當りの事有れば假令如何様の事有るとも必ず聊爾の  
 出来ぬやうと申置た兵部も待たず天にも地にもかけがへなき大事の若殿殺して仕舞ひ泣い  
 て済むか悔やんで済むかエ、云ひ甲斐ない事じやなア胸慾ともいふてかへらぬ此有様いた  
 わしやエ、残念やなア 淨」と拳を握り齒を噛み締め五臓を絞る斗りなり 義「ヤアこくにも  
 立たぬよま言泣きたけりや跡でゆるりと泣け 淨」首引提げて村上は旅宿をさして立歸る  
 「ト義清ツカ」と立上る皆々止めるを振切り急度なつて向ふへ這入る義作跡を見送り  
 義「申しお侍様私はモウお暇申升るマア人に何の合点もさせず何やらよい事があるおれが  
 いひなり次第になつて居よと無理やりに駕へ捻ぢ込み連れてムつた此屋敷さつきにからの  
 様子を聞けば私を身代りにするのじやげな何處の國にか滅相な人の首を断りなしに斬らう  
 とは酷い氣さお侍様畢竟身代りが遅くなつて間にあはなんたりやころあまの命夫、どうや  
 ら思ひなしの首筋元が冷いやりするヤレレレこわやのレレ 淨」ぞい髪立て、立出れば 兵「

ヤア一大事を知らせ其分には歸されず不便ながらも覺悟せよ 淨「斬込む刀をかいくり鐔  
 元しつかと片手に握り 義「ハテ身代りを使ふといふではなし正眞の首渡えたを誰が知つた  
 とて何の大事さうしてマア人の命を澤山さうに瓜か茄子切るやうにお赦し被成て下さり升  
 せ」ト宜敷思入して突離す」兵「ヤア土はせりに似合ぬ不敵者いよく助け歸されず 淨」又  
 切付ければ身をかはえ無刀のあしらひ手練の切先危く見ゆる後ろの障子兵部が揺ぐつと引  
 寄せ一ト刀 兵「ウワァ、」ト兵部障子越しに突れて苦しむ常盤井悔りして」 兼「こりや何  
 故の事じやぞいのう」ト常盤井宜敷思入ある」 淨「障子開いて信玄公血刀提げて悠々と立出  
 給へば奥方も義作諸共へりくたも恐れ入てぞ見ぬにける 兼「ハッハァ、ハッハァ、 信玄「勝頼  
 が最期にも出合はず今又兵部を手を掛けし某が所存の程常盤井も不審ならんヤア」 兼「濡衣  
 言附置きし物早くもて 兼「ハァ、 淨」いらへも涙ながら夫トの血汐に染なす片袖泣くく  
 御前へ差出せば信玄御手に取上げ給ひ 信「十七年の春秋を我子と思ひくらされし勝頼ころ  
 うれなる兵部が實の忤御身と我が血を分けし忤といふはアノ義作改めて親子の對面致され  
 よ 淨」思ひもよらぬ詞に胸り 兼「スリヤ腹切つた勝頼は我子でなく此義作が眞實の 信「ナ  
 、其証據は是なる血汐 兼「御佩刀の血り片袖に押當て」 兼「拭ひは見られよ 信「コレ見ら  
 れよ此血りの外へも散らず合躰せしは紛れもなき我子の血汐十七年前勝頼誕生せし初其板

垣も一子を設く其子の面ぶし我悻と似れば似るもの生寫し見分け難きは彼奴が惡念人知れずにすりかへ置きおのれが悻を主人と崇がめ主人の胤を我子となしおのれの手にも育てずして病死と偽り信濃の國の片邊へ一生不通にてやつたる事天眼通り得ざれ共即座に知つたる此信玄につくさ逆臣一分だめしと思ひしが今戰國の時に到つて人の子を我子となし我子を他家に育つる事智謀の一ツと奥にも語らず不通にやつたる其先へ我手を廻して育てし鑓作慮の圖をはづさず主人となしたるおのれが子に自然と罹かる今日の災因果のめぐりくるとも知らずおのが悻の身代に大恩受けし主人の子の行衛を探がして連れ歸り又殺さんとはかる人外め國賊とやいはん人面獸心天の御罰思知つたか 淨と扇をもつて丁々々々つたど蹴据ゑし信玄の詞に知つたる我子の身の上 斯る野心の者とも知らず忠義一圖の侍と思ふたが面目ない夫につけても此鑓作信玄様の御子とは知つてう但しは知らずにか 其儼は我を育てたる乳母が疾より物語又父上にも是迄に忍びくくの御對面 常スリヤ稚い時より百姓の家にありしが○憂にやつれし其姿今改めて親子の對面衣類大小早く持て 賽先づ暫らく○京都の武將義晴公果敢なく討たれ給ひしより父を始め諸大名へ疑かゝる今此時夫れ故にこゝ勝頼に腹切らせしも父の言譯未だ立つとも立たぬとも知れざる内に某が又勝頼と立歸らばいよく疑一身に止まり難きは此館身を民間に育ちしを幸い此身此儘鑓作と

淨「白洲へおりて鑓と笠世に降る雨は浚げ共我身にかゝる横しよき洩れて姿も濡衣が始終を聞て覺悟の刀すかさず止むる剛氣の手負刃物たぐつて我腹へぐつと突立て引廻し」ト  
 濡衣兵部が刀取つて自害せうとするを兵部とめて刀をひつとり我腹へ突込み引廻し」兵部、怒ろしきは天の御罰信玄公の仰せ一々違ふぬ我惡心悻を國の守と崇めんと子故の闇に眼も暗らみくくして悻が眼病薬も祈念も叶はぬ筈勿体なくも御主人を害せんとせし大罪人逆磔にも行われず大將の御手にかゝる有難さコリヤ濡衣此館の御重寶証訪法性の御兜今謙信の手に入つたり汝も信濃生れとあれば今の命を長らへて何卒國へ立歸り手立を以て兜を奪取り勝頼公へ奉らば親と一ツでない悻死後の言譯此上や有らん申し奥様御許し有つて此願お聞届け下さらば生々世々の御厚恩 淨と伏拜んだる四苦八苦不便と奥方濡衣引立て常大惡人の兵部なれども夫には染まぬ勝頼が孝心知らぬながらも親子となりし縁あれば濡衣を親里へ返すがせめて手向草 賽ホ、ウ尤なる母人の御計らひ兜の事も捨置かれず今切腹して死たる勝頼親と一ツでない言譯忠義の仕様は濡衣が心次第 淨と死を止める詞に道が死なれもせず 淨御意に隨ひ法性の御兜命に替へて取返さん 賽ホ、ウ適れでかした此鑓作猶も姿を下賤にやつし義晴公を討たる敵草を分つて尋ね出し其時ころは勝頼と立歸つて御對面 淨と早立出れば信玄聲かけ 信義晴公を害せしは四海を望む叛逆人中々容易

敵にあらず殊に手練の飛道具未だ日本へ渡らぬ兵器たどへていは、先づ此通り「淨」と用意の鉄丸車輪の如く投付け給へばすかさず笠にてひらりと受止め、火に徳の有るものは水に徳なし、諸葛臥龍が工夫の地雷火玉飛散る術あるともホ、ウ我方寸にも大川あり何かは以て恐べき、未だ日本へ渡らぬ鉄砲それこそ究竟詮議の手掛り尋ね出すは瞬く間、追付歸り装作が身の納りは、其時く、其常盤井に濡衣が暇申すも涙にて、物のあやめもなきつまに、似たる菅蒲や牡若、花紫の明方に、御手へ頓がて鳥兜、花にもなせし悪業の、有りて其名は鬼薊、因果はめぐる、皆、日車に、法の此身と絶入る兵部不便と見やる信玄、仁有り智有る勝頼に名残奥方女郎花桔梗蒔萱秋の野の月に名をふる更科や信濃路として出て行く、「ト皆々引ッ張り宜敷兵部落入る三重にて幕

三幕目 桔梗ヶ原の場

一弟	慈	悲	藏	一奴	可	内
一奴	沓	藏		一高	坂	彈
一同	百	藏		一妻	唐	織
一越	名	彈	正	一家	來	大
						勢

一妻	入	江	一若	黨	大	勢
一奴	宅	内	一上	下侍	大	勢

造物平舞臺向ふ打拔き原の遠見段通り板松真中に傍示杭建あり東甲州西は越後領といふ空より一面の松の釣枝淨るりにて幕明く、「ト幕の内より奴二人草蒔り鎌を持ち草蒔て居る」  
 「名も山深き信濃路にやさしき花の名に呼し爰を桔梗が原とかや甲斐と越後の領分よ分けて建たるさい目の場所馬草を蒔りに奴ら一本きめた刀をとき立鎌でくわつさくわさ踏荒したる名々が主の威光をとり場の領是も同じき二人連れ籠に拐を指荷ひ見て悔りのどつてう聲 百蔵「ヤイ下郎めうらが部家ではついに見た事もないしやつらども誰に斷り此馬草を蒔はした 沓蔵「悪く言譯ひろいだら二人り乍ら首が飛ぶ盗人めらが 宅内「ヤイ下主の口々ら下主呼のりがまやらくさい忝くも甲州の主と信玄公の御馬の飼料 可内「うぬらが知つた事でもないすつ込でけつかれ 淨「猶も引ぬく手先をとらへ 百「此印が目に見へぬか甲斐の領分は是より東西は越後領分と書てある 沓「うぬらが目には掛らぬか盗人といふたが誤りか 宅「サア夫は 沓「百「サア 皆々「サアくく 沓「何と 淨「ときめ付られ返答こつちり後ろから握り拳しをニツニツ 可「ヤア朋輩を打たれては後日に主君へ言譯立ぬモウ破れつふれじや 淨「二人りの奴がいとみ争ふ折こそあれ 唐織、入江、兩人ともに静まれく、 淨「聲禱の

裾けをらし高坂が妻の唐織越名彈正が女房入江ソレと差圖に腰元共用意の腰掛奥家老の女房と見るより下部共わかつてころはうづくまる入江傍りに心を付「ト上手より入江下手より唐織着付襟上下侍家來付添両方より一時に出て」入江「誰ぞと思へばお腕の沓藏何故の争ろひぞ包ます語りや 百「へい」喧嘩の元は馬の飼料信玄殿の家來めら此方の領地へ踏こみ蒞あらせし狼藉者我々に見附られ言譯なしの擱合でムリ升る 入「モウよい」夫でさつぱり様子知れた國が替れば心まで替れば替る甲斐の國には都て盜賊はやりしと人の噂も腔でない 唐「とあてこすられて唐織もむつとはせしが押静め 唐「互ひにお主の確執よりおのづと隔たゝる両家の中家來の仕落は幾重にもお詫び申答成れども只今のお詞にすべて甲州には盜賊有りとおつしやつた其一言が承りたい 入「チ、唐織様とした事が何の根問に及ぶ事此所にさい目の印夫を知りつゝ狼藉せしあなたのお家來ましてや町人百姓は狼藉とるは知れた事 唐「イヤおつしやんな印有りとはい言ひ乍ら一つに續きし原なれば誤まつて踏越へしもいは下郎の蒞たる脚 入「イヤ下郎にもせよ誰にもせよ其あやまちをさせまい爲建たる成る木は國下の禁制花咲木々の枝逆も折取るまじと印せしを手折は則落花狼藉此領分の印に限らずたとへ白紙に書逆も事を制する理に等しく是皆國の教へとして掟を守るは貴人より下々の掟とする信玄殿の息のかゝつた領地へ踏込み草一筋でも蒞取たは國を盜む

も同じ事其儘に指置ては夫彈正が落度女房の身として見て居られず高坂殿はともあれ私が夫彈正殿ついに一度も名を穢せし事おければお前の殿御と一口には本に云ふても下さんすな 唐「コイヤ面白い聞所お前の殿御が執權なら私が夫も執權職 入「イエ」そりやお前の胸一ッ深い様子は知らね共侍衆の口ぐせにも高坂様は逃彈正私の夫トは鎗彈正人にすぐれた鎗の上手と逃足早いお侍とは異名さへ違ふものまして心の内外も違ひやんすわいなア 唐「違ひやんすとはのめかす 唐「コレ入江殿武士の身は情によつて引も逃るも軍のならい入「よい口な事おつしやるお情でそんな異名を取る武士の法がムんすかへ 唐「サア夫は 入「サア 唐「サア 兩人「サア」くく 入「何とてムんす唐織殿 唐「云はれて唐織當惑の何と詮方此場の無念廣言憎しと思へ共入込んだ落度といひ夫トをさみする詞のはし聞につらさもいやまゝて派隠して 唐「入江様花によろへ名に顯わし非を改むるお前の存分返へす詞も家來の仕落今は此儘歸る共みつれば缺る道理にて今日のお禮は重ねて急度 入「チ、そりやおつしやる迄もない私が方に非太刀は受ぬ此以後主人の領分へ露程もお障りあらば二度とゆるしは致し升ぬぞ 唐「殘す詞も針の先真綿に包む唐織が立寄る所を止むる下部是非も涙に道筋を左右へこそは別れ行 入「左様ならば唐織様 唐「入江様 二人「重ねてお目に掛り升せう」ト双方へ別れ皆く「這入る」 唐「爰に信州筑摩郡の邊りに住む慈悲藏といふものあり生



得親に孝心の道は昔しの郭巨にも替らず積る年の數は三十の上はよう／＼と二ツか三ツかの稚子を抱入たる懐の内疊りなる冬の空寒さをしのぐ種ならで歎の種と形り振りも茫然としてイめりト向ふより慈悲藏子を懐に入出て來り」慈ハア誠や人間の吉凶は生るゝ時の運に任すといふ母の胎内を出でしより誕生の祝儀とてさいんざ諷ふ悦びは貴人高位は云ふに及ばず下万民の我々迄も悦びに悦びを重ぬるが親子の縁夫に引替へ其方は僅か慈悲藏が悴と生れ來るもうちが因果親の心子知らずと我肌付ればうつゝかく結ぶ榮花も夢の夢頭是なけれと聞てくれ親として子を捨るは人間成らぬ境界と笑ひし此身に廻り來て今といふ今其方を愛に捨置此親が一人りの母へ孝の爲捨れば拾ふ神佛の力をかつて成人せよ親と思ふな子でないぞ 淨思ひ切ても切かぬる産の母の歎きといひ我も不便さ身に迫れと 慈うちをかばへば不孝と成り孝を立ればうちが難儀理にせまりたる思ひ子を捨る此身の孝行より捨らるゝかことが孝行むといとばし思ふなよ 淨言譯涙目も明ねばそつとかたへに置土の上によしたる稚子がわつと泣出と聲に恠り抱上泣を道理と愛かして山を越へて里へいた里の見やげの見納と抱しむればすやく顔道童の氣さんじと打守り／＼ 慈名は慈悲藏の慈悲もなく今目前に捨置て歸ると知らぬ心根を思ひ出せば不便やなア 淨いとど涙のやるせなく 慈ア、我ながら誤たり心弱くては叶ふまい 淨包み廻せし絹の香の思ひは二重胸の

やみ元の所へ押直せと知らぬ子供の寐入ばな一世の別れと蝶言を跡に残して雪國の積る歎きとしられたりト慈悲藏抱子番の中へ入心残して向ふへ這入る」淨斯る折から甲斐の國の執權高坂彈正時綱供人あまた引具して當所筑摩の御社へ詣ふでの道もぼう木の傍件の捨子に急度目を付けト高坂彈正供人大勢付出て來り」高人音稀ある街道に捨られし稚子は犬狼の餌食は必定 淨家來を止め歩みより 高ム、最早水子と云ふでもなく男子と見へて氣高き寐顔いやしからざる者の悴何故愛に捨置し子細はいのに 淨見廻る小袖のくけひもに付たる下げ札手に取上げ 高何々甲州の住人山本勘助ム、此山本勘助といふは生國は三河の者山うつと見へて魂は異國の韓信孔明にも劣らぬ軍者主人兼て御懇望斯る亂世の其中でも諸方に招く今日只今此稚子に名を記し捨たる主こそ芳ばしき勘助を味方に入る信玄公へよき土産ヤア／＼者共身が屋敷へ連れ歸れ 淨詞にハット若黨中間抱取らんとする所へ 慈ヤレお待被成彈正殿 淨聲をかけたる立派の侍越名彈正忠政我領分に打通れば高坂は甲斐の領ぼう木を中に狹箱不和成る中の兩執權スハ事こそと下部まで片唾を呑んで聞居たるト上手より越名彈正上下侍鎗持狹箱持つれて出て兩人とも狹箱に腰掛る」慈イヤ何高坂殿只今物蔭承れば是成る捨子が下げ札に山本勘助と書付し故お拾ひ被成る御所存尤どは存すれども見升る所双方の領分へかゝり合せし上からは貴殿の儘にも成升まい手前

の主人長尾謙信日頃望みし折に幸ひ其姓名を書顯はま爰に捨しは某が願ふてもなき忠義の  
 一ト品貴殿に遣つては武士が立ぬ是非つれて歸り度は彈正が首諸共さもない中はいつかな  
 叶との 高ホ、ウさい目の論なら金輪際拾わにやならぬ稚子が踏たる足は手前の領分 越  
 イ、ヤさにあらず物の始めを頭といへば此方の領分を枕としたる山本勘助越後の國の旗大  
 將見事貴殿が拾ひ召るか 高チ、いふにや及ぶ我方へ踏延したる足元が肝心かなめの甲斐  
 の國高坂彈正拾ふて見せう 越イ、ヤ越名彈正が連れ歸る 高見事貴殿が 越おんでもち  
 い事拾ふて見せう 高サア 越サア 二ハサアくく何を小癩な 越刀の柄理を非にさ  
 せぬ詞詰争ひ爰に二人りの女房とくより立聞此場のしぎ見やる眼も角菱の名々夫トを押隔  
 て高坂が妻威儀つくるひ 唐及ばぬ私が一ト思案女のさしでがましけれを彈正殿聞かしや  
 んせ甲斐と越後の領分へ捨置し稚子は両家に望む山本勘助是を手筋に召抱へるお前方の胸  
 の内一方へ拾はれては是非一方は國の耻其争ひの基となり肝心の此子に乳も吞さず若しも  
 の事があつたらばお望も水の泡何にもせよ両方より乳房をふくめし其時に何れなりとも吞  
 附方夫を印に御拾ひあらばどちらにひけもおとりもないとわしや思へ共跡や先思案してた  
 べ我夫マ様 越流石女の智慧の海實に高坂が妻ありし 高女房でかした争ひ止むる乳房の  
 鬮取り幸ひそちが持合せし乳を與へて試みせん彈正殿も相應の乳母でもあらばお出し被成

越入江にあてたる詞の端聞よりくわつとせき立入江入かかもと様の御思案も鼻毛延ばし  
 た今のお詞越名彈正忠政が女房乳母奉公は致さぬぞハイ乳母奉公は致し升ぬぞ今一言かつ  
 じやたら二度とゆるしは致さぬぞ 越ヤイく馬鹿者め大事を前に置乍ら無益の舌の根動  
 かすなイヤ何高坂殿負た子に教へられるとやらで内室の詞に伏し女房くが乳を勧めどち  
 らへ成りと片を附此場の別れはいかいでムらう 高ホ、ウうれや此方も望む所吞むか 越  
 吞まぬは 高互ひに運づく唐織早くく 越早くくととめられだつく胸も押静め抱上  
 れば目をばつちり明けて三ツの稚子がわつと泣出す口のうち乳房ふくめてすかしても吞む  
 てい更にあらざれば見合す夫婦が顔と顔 入江コソ申唐織様何ば勧めさしやんしても子供  
 はどうでも正直なドレ私が替り升せう 越わしが替ると抱取る入江心に拜む神よりも頼み  
 に思ふ此乳房たつた一ト口吞でたもとゆふり歩るけどけがな事猶も正跡泣叫ぶ聲を止めん  
 ど手に汗をにぎり詰たるいたいけも憎やとすねて置露の頼みも綱も切れ果てし入江が思ひ  
 唐織も残り多さに又立寄りすかしなだめて抱上れば泣やむふしぎ女房より高坂彈正大きに  
 悦び 高軍師山本勘助信玄公の御味方 越ヤアくくく両方共に吞付ねばいまだ善  
 悪知れざる中其方へ連れ歸る其譯聞う 越と詰かくる 高ホ、ウ合点行すば聞れよ入江殿  
 が抱上れば泣は治定あの如く身が女房が手に有る内泣ぬが縁ある是證據又二ツには甲州の

住人山本勘助とあるからは紛ふ方なき手前の領分最前ちらと承りしが越後領へ指さしは此  
 後は赦さぬとやら其御内室の詞もあれば是逆もまつ其如く稚なれども甲州の町人其許が  
 お構ひあらば却て狼藉國賊の名を取らるゝか彈正殿 淨と先にかけてる詞の裏釘折返され  
 てさしもの彈正返答せき切る女房入江思へば無念と唐織が抱きし稚子無理やり引取れば  
 わつと泣く 唐是は無念な入江様さつきの喧嘩に負たる替り此子斗りは叶ひ升せぬ 淨あ  
 なたこなたといきみ合ふ装はらゝく妻とつま顔ははのめく薄櫻乱れちつてぞ争ふ風情一度  
 にわくる夫と夫中も高坂聲はげまし 高實やいたつて正直は頭べに宿る神の慈悲一陽の  
 春を待ち雪中の梅にも増る主君の悦び此身の忠義 唐さればいさアお慈悲深い信玄様の御  
 威勢が顯はれて私が無念もたつた今ナア申し入江様最前のお詞にお前の殿御を何とやら今  
 一言御所望でムリ升る 淨とあざける女房 越ホ、ウ聞たくば名乗つて聞かさんよつつき  
 け 淨長尾謙信が耶等 越越名彈正鎗彈正 淨突出す鎗先「ト家來の鎗を引取り高坂に突  
 て掛る品よく留て」高ム、ハ、ハ、ハ、通れ手練の此鎗先受てはたまらぬ大事の稚子運て手  
 前は逃彈正唐織來れ 淨立別る、胸に一物二人りの彈正爰に捨子の隨一と其名も高き山本  
 氏伴ひ歸るぞゆゝしけれ「ト何れも宜敷見得よて三重幕

四幕目 山本勘助住家の場

役名	一家來	左	右
一兄 横藏	一家來	左	金吾
後 山本勘助晴義	一同	右	源太
一弟 慈悲藏	一同	右	門九郎
後 直江山城守種綱	一同	九	郎
一女 房お種	一近習	大	勢
一母 越路	一鎗持	一	人
一長 尾景勝	一狹箱持	一	人
一妻 唐織	一行列	大	勢
一百 姓戸助	一青合羽侍	五	人
一同 正五郎			

造物三間の二重舞臺上手折廻り障子家体下手敷疊入口例の所に藁屋根にて雪持舞臺雪うね  
 並べある淨るりにて幕明く 淨勇々しけり秋の末より信濃路は野山も家も降埋む雪乃中な  
 る白髪雪女ながらも故有て男のすなる名を名乗る山本勘助と人毎に岩間の水の音絶て木  
 の葉の銜ニッニッ年もいたいけ稚子をすすお種が手枕にねんねが守はどこへいた山の薪

をさういふつらさは愛らで一休み、跡在郷唄にゐると向ふより百姓戸助正五郎二人鋤鉞  
 かたげ出て内へ這入る」正五郎は種女郎冷へ升のう、種、正五郎様戸助様吹雪で外は歩  
 るかれまゝいお茶も沸いてムんすわいなア、戸、イヤ、構ふまゝ子持は手が放されぬ慈悲藏  
 殿は留守かの今日もけふ連寄合ふとアノ人の噂お袋への孝行と申すも愚か兄への深切、正  
 本の子は次にして兄貴の子の次郎吉と大切にしろる、女夫の衆の心意氣名も慈悲藏といふ  
 が尤、戸、さればいのうろれに又兄の横藏殿兄弟とてあのやうにも違がふものか親への不孝  
 さ弟への酷さ、正、親兄弟にさへあれじやもの村中で持て餘すが尤外、家を家と出歩いて隣  
 り邊へだれれ込み、戸、人の娘下女婢當り次第に孕まし其おさもりのアノ小忰も親に似た子  
 の鬼子で有らう、兩人、ハ、ハ、ハ、口はさがなき山道を歪まぬ武士の梓弓胸の袋に押包み  
 孝をばづさぬ慈悲藏が獵り漁りも母の爲流れに添ふて立歸る、「ト在郷唄に成り向ふより慈  
 悲藏石持の着附おちよばからげにて笹の葉に鱒のさしたのを持出て來り直につゝと來て内  
 へ這入る」慈、今戻り升た、正、孝行者お歸り佛性な慈悲藏殿殺生に出られたもお袋への養  
 ひか夫程にさつしやつても氣に入らぬアノ婆様さりとほさつ片意地者、慈、ア、コレ、  
 勿体ない事いふて下さんな假令身を粉に碎いても胎内にあるから今日迄の親の苦勞較べて  
 見れば百分一アノ鳩部屋の鳥でさへ鳩に三枝の禮ありと諸鳥に勝れて孝行お鳥何處からと

もなう此家の軒へ集つて來るも慈悲藏が心少しは通じ類を以て集つたりと思ふて嬉う思ひ  
 升、戸、成程夫れはこちとらも去る眷物で見置た鳥は親の養ひを噛み反すといふ本文おれ  
 が毎晩女房に孝行にする心が通じて鳥がかあ、く、唄の顔いんで見やうか、正、左様ならば夫  
 婦の衆、慈、お二人り様、正、戸、おさらばでムり升る、慈、ようお出被成升した、慈、と出て行く  
 「ト跡在郷唄にて二人共橋掛りへ這入る」慈、母者人は最前からお休み被成れてかお目が覺  
 めぬ其内にお肴料理して上げん次郎吉も寐入つたか、慈、ハイ此子が機嫌宜しう育つに就い  
 ても氣に掛るは峯松が事はんに兄御の横藏様如何に我子じやない連捨て、仕舞ふと無理計  
 りお前が外へ出やしやんと私を女房に仕やうの何のとつらい悲しい事聞くとお前の孝行  
 立てる爲と辛抱するにもしられぬは眞實な子を胸慈なよそへやつたといはんす其先は何國  
 の誰でムんすぞいなア、慈、ハ、ハ、夫を問ふがモウ未練氣遣ひしやんな此貧家に置くより乳母  
 に乳母を付ける結構な内へ養子にやつたあいつはさつ果報者モウ思出さすともとんと捨  
 たと思てわや病み煩らひといふ事もある万一先で死んだらな昔じやと諦らめておりやわ  
 る氣じやわい、慈、といひながら犬狼の餌食ともなりはせぬかと子を思ふ心は一ツ一ツ間の  
 内ろつと伺ひ、慈、是れは扱寐入つてムるかと思へば裏へ出てお氣丈千萬炬燵に火も有るか  
 追付御膳の用意しや、慈、アイ、と片時忘れぬ孝行は又と類ひは嵐吹く影も吹雪に高

足駄〔ト是にてお種次郎吉を抱き奥へ這入る慈悲藏上手へ這入る〕 雪踏分け尋ね来る人は  
 長尾三郎景勝万卒は求め易く二將の得難しと此隠れ家の弓取を慕ふて來たる道すがら景勝  
 四方を打詠め 雪ハテ降つたりな昔唐土蜀の劉備諸葛孔明を召れんと臥龍公を尋ねし時野  
 路山路も銀世界今又爰に我望み雪に隠れし山本の景色ハテうららかな眺めじやなア 左金吾  
 實に我君の仰せの如く 右源太「此大雪を踏分けて 右門尋ね來りし片田舎 九郎葉家の軒に  
 立つ煙り 左心の目當は 皆々慥にアノ家 景皆の者 四人我君様 景イヤ立寄て規はん  
 皆も來れ 四人ハア、 雪三度びおとなふ古事の雪も厭てぬ門の口」ト始終雪おろし三味  
 線大小入りの相方にて景勝本舞臺へ來る跡より右の人数の皆々附添ひ來て門口よ叩へる景  
 勝は高相引にかゝる皆々下手へ叩へる」 雪二重の腰の白妙に枝も撓はしの雪折竹杖と我  
 子に助けられ庭に佇む老母の風情「ト始終雪風にて跡相方上手より慈悲藏母親の手を引出  
 る」 慈申え「此雪にさりとては冷ぬ升る蒲團の上にムつてさへ御老体のお身の上ひらに  
 みれへ 雪と取る手を拂ひ 母七十に餘つて愚鈍には成つたれ共子供に物は教わられぬ凡  
 べて親に仕る起臥の介抱は誰もする何事に寄らず親に背かぬ様にするのが誠の孝行寐て計  
 りあるも氣詰りさに雪の景色も見やうと思ふ母が心を妨ぐるは何と不孝で有るまいか 慈  
 ハア一々誤まり奉る其段には心付かずお年寄られて一日く御氣力の落るが悲しく今日

も獵に出元氣を養ふ谷川の 雪ますく御達者なるやうと志の捧げ物 慈賞翫被成れて下  
 さり升せ「差出せば」 母イヤく物の命を取りうれが何の養ひ眞實親の養ひならば山川  
 此珍物よりつい裏に有る藪の中筈を畑て來い 慈ハア夫れは御意ではムれ共此寒中に筈が  
 母サア有る物を取つてくるは子供のする事無い物を取つて來るが本の孝行斯ういは母  
 が難題言付けると思はうが此位の難題に困る様な器量では智者と呼ばれて人に知らるゝ弓  
 取には成られぬぞよ妾が夫トは天が下に聞けし軍師一生主人を取らず過された忘れ篋み兄  
 弟の子が器量を見定める迄は女子乍らも夫トの名を繼ぐ山本勘助といふ名を譲り父の軍法  
 奥儀の秘書の巻を傳へうとは思へ共夫では中々勘助には成られぬく 慈サア其名跡を受  
 けたさに心を尽す此慈悲藏 母ソレく其名がはしさに孝行尽すは眞實の孝ではない上皮  
 計りの詐り表裏 慈是はくお情かい苗氏を望むも出世して母人の悦び顔拜みたい計り兄  
 者人の心入と一つに思し下さるは餘り難面い御心お胴慾でムり升る 雪と雪又喰付き落涙  
 に老母は猶も腹立聲 母コリヤ何ぼ利口に言廻しても此年月膝元を離れ他國してわてけふ  
 此頃俄に深切是が偽りといふ證據おのれが心に引較らへ兄を不孝といひなす悪心思へば見  
 るも思まこし、 雪杖揮り上げて打たんとす老のりさみに踏くしく駒下駄飛んでよろめく  
 足コハ危ふなやと抱止むれば 母イヤくおのれが世話の受けぬわい其處退きおれ 雪親

と子の心合はざるかたしの下駄最勝透かす拾ひ取り「ト駒下駄門の外へ飛ぶ景勝直ぐに拾ひ袂紗を出し載せ」景「御召物是に候」母「と老母が前に押直しまさつて頭へを下らるゝ母はつくく打まもり」母「人品骨柄只人とも見ぬぬ御方が賤しい婆々に履物を直されしは黄石公に沓を興へし張良が佛ハテ」母「奥床しい御方や」母「お近附にもなつて篤と御禮も申したいコリヤ慈悲藏其方に用はない立て行け」母「ハッ」ト「うぢくする」母「早う行きや」母「ハッ」母「行けといふに」母「ハア」母「と何か子細は有磯海母の心を計り兼ね是非なく奥へ入りにけり」母「いざ先づこなたへ」母「請すれば」母「然らば御免」母「然らば御免と景勝は辞する色なく座に直り」母「見る影もなきわばらやへ高位のお越しは是には何か子細ぞ有らん」母「御推量少しも違はず黄石公に名は劣らぬ軍者山本氏の御子息を召抱へて一方の大將と頼まん爲身不肖なれ共越後の城主長尾謙信が嫡子三郎景勝是迄参上仕る」母「と禮儀正しく述らるれば」母「扱こそく始めより自然と備はる御眼さし」母「御望み被成るゝは兄弟の内兄か弟か」母「イヤ景勝が望む所は惣領の横藏殿」母「ハテナ最前より御覽の通り孝行を慈悲藏を差置さ不孝な兄の横藏を御家來に被成れうとおつしやるあなたのお心は」母「イヤそりや其方に覺ゆる事日外諏訪明神の社内にて面体恰好とつくりと見届け置いた横藏殿是非共所望致したい」母「よ、さうおつしやれば思ひ當るよ」母「に思召ばこそ大名のお手づか

らいやといはさぬ此婆々に下駄を授け給ひしは適れ敏さ」母「殿ぞかし」母「兄は只今他行なれど此母が成替つて御家來に差上げ升せう」母「過分」母「其箱是へ」母「家來」ハア、母「如何に老女主従と成るからは一命を捨てる共忠義を勵むは武士の習ひ志の此品是非に受納致してくりやれ」母「ハテナ心有りげさ此賜物中を一寸」母「進物箱へ手をかけるを」母「マイヤ浦嶋が甲斐も有るかや玉手箱」母「明けていはれぬ此箱を」母「是非共所望身共が土産」母「主と崇むか」母「家來と呼ぶか」母「其御念には及ばぬ事」母「モン違變に及ぶ其時は」母「母が敏首差上げ升せう」母「適れ老女」母「景勝様」母「急度詞を番へ申したか」母「と詞詰め威風鏡さ北國武士越後縮の物馴れて引かぬ其場の信濃路や」母「是にて景勝門口へ出て一寸思入有て」母「老母近う」母「ハア、」母「ト門口へ來り辭儀する」母「五月雨や池の眞菰に水増して何れ菖蒲と引きぞわづらふ」母「五月雨や池の眞菰に水増して」母「一寸思入有る」母「何れ菖蒲と引きぞわづらふ」母「ト母と顔見合せ」母「老女然らば」母「別れて」母「是にて越路箱を抱へて奥へ景勝思入有て供を連れ向ふへ這入る」母「ころは歸らるゝ木曾山木立荒くれて無法無徹の仕にせにて名も横藏の筋違道草鞋の日も降埋む餌竿肩げて門口より」母「雪嵐出の唄にあり向ふより横藏好みの形り簑笠草鞋にて餌竿を肩げ捨置詞にて出て直ぐ門口へ來り」母「横藏母者人今戻つたぞや」母「聲に老母がはやく顔」母「ト奥より母慈悲藏お種も出て來り」母「チ、兄待

兼ね升た此間はマア何處へ行てゐやつた 横「ハテ此わろはおれが足でおれが歩くに何所へ  
 ちと飛次第飛ついでに戻りがけ小鳥十羽程取らうと思ふて顔も足も切れるやうなわいの  
 母「道理ぢや〜サ、ちやつと上りや〜」横「アイ〜」母「と草鞋の紐手づから母の慈悲藏  
 も足の湯を取り機嫌取る 慈「兄者人お足洗ひ升せう 母「イヤコリヤ〜」孝行を兄がからだ  
 に不孝な弟が手をさへるは穢がららしい母が洗ふてやり升せう 母「と一人りにつらく一人  
 りには甘い女子の鼻の先泥脚突付け 横「エ、若い女の手のさはるはよい物ぢやが干物の様  
 な母者人の手で情けの罪科ぢや如何様おれは孝行者此小鳥も晩の夜食にこなた様に喰すの  
 ぢやかい焼て貰ふておれが喰ふ氣兎角おれが口さへ養へばこなた様の氣が休まるノウ母者人  
 母「チ、さうとも〜」アノマア孝行な事わいのうサア〜」巨燧に火も去てあるサア〜」わ  
 たりや〜」横「ふ、こなたさんが今迄わたつて何の恩に着せる事エ、コリヤマアぬるい  
 水巨燧ぢや 母「イヤ〜」おんまりきついのぼせてゐるい 横「夫れがたわけといふものモ  
 ウこなたも追付け火屋へ行くからだ稽古の爲きつい火にもあたつて置かしやれサア足揉ん  
 で下われ 母「踏出す両足慈悲藏見兼ね 慈「ドレ私がちつと 母「と立寄れば 母「又差出るか  
 小癩者兄や斯うかや〜」母「と撫さするはんろ息子のくわびら足 横「ア、逆もなら美しい  
 お種が揉んで呉れりやよいにハア、貴様は子守りか峯松はどうした 横「ハイお差圖の通り

思切つて一昨日主が何所へやら 横「ふ、捨て、仕まつたかよい事〜」一体ふりや貴様に惚  
 れてゐる時に幸ひと噂のそげめはてこねて仕舞ふて跡に残つた小悴の其次郎吉邪魔な餓鬼  
 め稀殺さうかと思ふたれどおぢぢもので子といふ者は親よりちつと可愛い者ぢや又大さう  
 なつたらおれに似て孝行にまゐるかと思ふて貴様に育てさすららはノウ慈悲藏畢竟我身と  
 相合の子逆もの事に女房も相合にする合点お種顔ふらすとんといやいのそれをいやとい  
 ふと慈悲藏が大事にかける此母人にあたるぞよこれまか〜と揉ましやれいのうエ、まだ  
 火がぬるいわい」ト跳ね廻り思入むる」母「戀の意趣を巨燧に當る非道者持て餘してぞ見ぬ  
 にける折節表へ先走り」ト「ハタ〜」にて向ふより上下侍一人走り出で来て門口にて」侍「〇」  
 山本勘助殿に用事有て大僧正武田信玄只今是へ」ト引返し遣入る」母「と案内に思ひがけな  
 き夫婦が不審子細あらんと横藏が起も直らず空寐入り 母「ハテ扱思寄らぬ大身のお入り卒  
 爾には母も會はれまい慈悲藏もてなしや横藏ははしたり何やら云ひ〜」寐入つたさうな風  
 引さやんなや 母「と一ト間の障子引立て何ふ表より匂ふ留木の高阪が妻と知らせて堆き雪  
 の懐稚子を抱て幾重の柴の庵 唐「そら達は村はづれにて供待ぢや 母「家來は先へと追返  
 し行儀正しく打通る訝かしながら手を突て 慈「信玄公とは思ひの外女中のお名は 唐「ふ、  
 成程御不審は尤偽りならぬ信玄公の是此床頭に對面被成れ 母「いふに女房立寄て 母「ヤア

峯松か戻りやつたか 淨「飛立つ斗りの胸の内押鎮め 種是のく御苦勞様やそんなら峯松を貰ふて下さり升たはお前様かへいかいお世話様でムリ升 唐「コレく疎相いふまひ甲斐の國へ養ふからの最早一國の世繼則今日の信玄公孝心深き慈悲藏殿誠に軍術の達人と聞及ぶ師範共御頼み被成ん爲態々見やまやんせコレ此愛らしい此信玄が抱へに來たお受け申されてよつらう 淨「恩をかけたる名將の情けは肝にこたゆれどとぼけた顔で 慈「是はまたり私は此在所の山賤鋤鉄の外何も存じ升せぬものを軍術の師範杯とは勿体ない事かつしやるまいぞ 種「コレくこちらの人お前の器量を聞及んで有るからはきつい譽れな事じやぞへ卑下するも事によるハテ軍法奥義は母様の傳授を譲り受けて 慈「さればいやいそれを貰らふて山本勘助になつたれば抱へられまいものでもなければ未だ姓も變へぬ内軍術の大將のとろりや山の芋を蒲焼にそるやうな者名さへ慈悲藏逆轟さへ踏殺さぬ者が軍に出て人の首が何としてく 淨「とつても付かぬ顔付に唐織ハット胸せまり 唐「無調法な女の使お氣に入らいでかつしやるのかどうでも味方に付いて貰はねばならぬといふ其譯ハ桔梗ヶ原に此捨子 種「エ、唐「山本氏と有る書附を印しに拾ひ取たれどサアどうも力に及ばぬは肝心の乳に吞付かず何んば抱いて突付けてもあつちく指さして泣て斗り此大將に兵糧が無ければ命も危ふし其兵糧を續ける謀は慈悲藏殿お前の心に在りさうな事甲斐の國へ味方につ

いて夫婦して守りたてやうと思ふ心はムんせぬか此マアちつとの間にコレをこもかも細つた事を見やしやんせ道理でもあり眞實の母御の懷を離れて他人の手に何の育たう夜は得寐す晝こうつく泣寐入に 淨「寐た顔のいちらしさ本に見る目が悲しいと語る内より女房が種「チ、可愛いやさうでムんせう 淨「とわつと泣出す母親の聲に目覺ましえがみ付纏る乳房の一人りにて見の手柏の二々面儘ならぬこそ恨みなれ一ト間に母の聲高く 母「コリヤく慈悲藏子供を餌に思にかけて味方にせんと後ろ穢あい信玄に奉公しては武士が立つまい去り乍ら軍法奥義も傳らず家の苗字も繼ぐ氣が無くば勝手次第 淨「ともぎさうに言捨障子はたどさす 慈「ハッ 淨「と立上り我子を取て引放し 慈「須彌滄海の大恩を受ければ逆母の恩にはいつかなく信玄に事ふること存じもよらず變改申すコリヤ女房一旦捨てた此悴に見苦しい何はゆる縁に曳れて知行取ては末代迄も我名折れ親子の縁をさつぱりと切つて仕まへば信玄に恩もなく又義理もなし〇是れ此竹も本は竹に雀と離れぬ中今餌さし竿と成る時の鳥の爲には仇敵ことによつたら親子兄弟敵味方となるも武士の道御返事は此通り稚子連れて早歸られよト臺詞の内に餌差竿を取つて思入有て二ツに折り 淨「詞鏡るどに言放す 唐「ハア、此上は力なし 淨「とはいへ歸つて御主人や夫トに何と詞さへ泣くく抱き立上る コレノウ峯松一世の別れせめてマア此乳が一ト口吞ましたいと慕ふ女房引退けて枝折戸び



つまやう表にと「ト唐織に子役を渡し唐織不承く」に取るとお種行かうとするを慈悲藏か  
 種を突廻して唐織を門へ突出し門口へめて貰入を栓に差し置く事あり」種「心に残る雪中  
 へ雨は涙の子を抱きおろし襦の下くすり括り添へたる後紐垣に結ぶは義理の綱神や捨置く  
 竹の子笠いたいけつじりに打着せて」ト唐織子をおろし襦の中へ包み竹の子笠を被ふせ色  
 々ある内には女房色々思入ある慈悲藏こなしあると唐織花道へ行きかけ思入有て」唐山  
 本の氏を繼ぐ慈悲藏殿を軍師と頼まんと是迄來玉ふ信玄公ぞうも此儘では歸られず是非共  
 味方に付くといふ一言を聞く迄は此信玄は其許の門口を立去らず雪に凍ひて死す迄も爰に  
 座を占め返事を待つ大將の命助けうと殺さうと御思案次第よい御返答を頼み入る種しづ  
 とかけたる雪の笠思ひを残し捨て行く種「ヤアらんならばんはまた外にわやるのか」ト  
 門口へ行かゝるを慈悲藏止めて」種「コリヤ」門にい誰もぬよまゐてからがわりの他  
 人今傍へよると信玄の恩を受けたになつて母の一言反古になる此簀戸の外へ一寸でも出  
 るがいなや夫婦の縁も是れ限り種「腰提げの紐かきがねを括る酷さは我ながら如何なる  
 悪魔鬼か蛇か」種「六韜三略の望みある此慈悲藏慈悲も情けも知つては居れど」種「母の詞は  
 背かれぬ」種「どうで乳房に離れたもの逆もない命凍ひて死なば死次第そちもソレ其子をそ  
 でにしては兄貴への義理が立ぬぞハア、何かに紛れて大事の孝行怠つたりソレ裏へ行て雪

の中の笥を堀つて進せう」ト身拵らへして簪着て草鞋はさ鉢を持ち笠を持つて」種「簪笠取  
 て打かづきあつた親子の縁を絶つ鉢振かたげ」種「此寒氣に荒男でさへたまらぬもの況して  
 やよたけないからだア、子を捨る鉢は有れど」種「親の詞は捨て難き裏の鉢へと踏分ける雪  
 より先にいとし子の埋れ死なん不便やと見合と顔に降る涙みぞれ争ふ濡翅しはる、夫トの  
 後る影」ト兩人宜敷振りあつて慈悲藏憂ひ乍ら上手へ這入るお種跡見送つて思入有つて」  
種「いかに望みが有れを連」種「天にも地にも一人り子をよう酷たらしう捨られた今の女中  
 も氣の強い置いていぬ程ならばおいへに寐さしていんだがよい可愛やくひもじからうの  
 にもつとの間をど抱きたいわいなア」種「と任せぬつらさ次郎吉を漸うくそつと下に置き  
 さし足乍ら庭にかり覗けば門にしよんぼりと」種「ばんよそれがマア何と命が有るものぞい  
 なア」種「明けんとすれどかきかねに錠の代りの真結の酷さやつれなどあせる程雪にしめつ  
 て明かぬ戸に乳たいくも絶ぬく風のうたてや治良吉がわつと泣聲ハア、悲しやと又  
 駄尻り抱上げて雪やころん殿やころんコハそも何たる因果ぞや」種「此子憎いじやなけ  
 れども」種「我子に乳が呑ましたいコレちつとの間く寐入つてたも心も空はかさくらし又  
 降りしきる白雪に外に泣聲八寒地獄を呑むより身にこたへ思はず知らず轉びおろし砕けよ  
 われよの念力にはづる、戸より身は先へ」ト門口の戸はづれ外へこけ出て」種「かはいや

くくなア<sup>譯</sup>と我子を肌を抱め流涕こがれ泣聲に唐織小蔭をついと出でト唐織以前の儘出るお種愛ひのこなし有て」唐信玄公を抱上げ乳房をふくめ参らそからの慈悲藏殿は最早此方の味方夫トに知らせて悦ばせんチ、さうじや<sup>譯</sup>と勇んで館へ立歸るハットお種も心付さうるつく際に「トうろくする唐織下手へ這入る此内後ろより」<sup>譯</sup>エ、<sup>譯</sup>いつくより懐劔てうと峯松が肝先貫き息絶わたりエ何事と驚く内次郎吉引立横藏が一間をさして駈入れば<sup>譯</sup>、扱は我子の害に成ると横藏の仕業じやの義理も法も情も最う是迄敵さを取らいで置うか<sup>譯</sup>と死骸を小脇にかい込で常に弱き女氣も恨に強き力帶奥の間さして「トお種いろく思入あつて子役に小柄の立ちし儘上手へ急度見得して走り這入る」<sup>譯</sup>急ぎ行く返し

造物一面の敵疊に成り真中切破り舞臺前に雪畝切穴有り内に澁紙に包みし箱を入れて有る一面に雪畝所々に雪の塊り切雪澤山ある正面に慈悲藏鉢を以て急度見得にて宜敷道具納まる<sup>譯</sup>早日も暮に近づきて鍾孝行の道ぞ連古き例の跡を追ふ子故の關に白妙の道も涙に見ゆ分らず<sup>譯</sup>何ば堀ても筭が有らう様はなけれ共親を思ふ一心を憐み天より授かる事もやあらんト慈悲藏段々堀る事あつて鳩一羽飛で来て」<sup>譯</sup>心を込めて一尺二尺底は白羽の鳩一羽飛んでおりしも飼なれし鳥も心の有るやらんと又堀りかへせば又一羽友呼び誘そふ生

類の有様つくぐ打守りト段々堀ると鳩二羽飛びかりいろく有つて思入有て慈悲藏こなし有ると本釣鐘」<sup>譯</sup>最早入相諸鳥群に歸る頃一羽ならず二羽三羽集り來るはハテ心得ず誠や兵器地にゐる時は鳥群をなすといへり我父は日本の軍師此所にて世を去り給ふ一生諸んじ置かれたる六韜三畧の秘密の巻此下に埋み置れしやらん扱は我孝心天に通じ鳥類是れを知らせしかハア、<sup>譯</sup>有難し忝なしと心勇んで堀穿つ雪も散乱村雀ばつと立たる敵の中窺ふ兄が頼魂ト後ろより雀數多飛び出で、横藏鋤をもつて下駄にて出て急度見得になる」<sup>譯</sup>、野に伏兵ある時は歸雁行を乱る油斷の罫を窺ふ惡鳥殺さうと生さうと手の内の雀罫に手こたへ此下をト又堀りに掛る」<sup>譯</sup>エリヤ慈悲藏埋んである傳授の一卷われにはやらぬ兄が出世の種にするわい<sup>譯</sup>すりやお前無理でんしよ<sup>譯</sup>サイヤイ無理いふが兄の威光阿房鳥の孝行をかし邪魔なうぬから仕舞てとる<sup>譯</sup>イヤさうはなり升まい苗氏を繼ぐは此慈悲藏<sup>譯</sup>見事われが<sup>譯</sup>おんでもない事繼で見せう<sup>譯</sup>ア小癩な奴おア<sup>譯</sup>小癩な退けと鋤と鉄落花微塵の雪飛んで堀り出す箱の二人りの争ひ道と非道の二筋をすべりつこけつ掴みあふト雪嵐大小入り合方に成り二人立廻り宜敷有つて韋駄天に成り花道へ行く又立廻り有つて跡へ戻りかけて箱を取合ながら木なしに此道具廻る返し

造物元の道具へ戻る前側障子こめ有る内に母の越路白木三寶に九寸五分白木臺に白無垢上

下を載せ傍に置き着附襦にて座り居る兩人其争の儘にて舞臺へ來ると能き程に前後障子を引抜く事兩人見て悔りして「母」はづみにがわと取落し池にさんぶと水煙騒ぐ群鳥兄弟も不思議と見とる、後より障子ぐわらりと母の聲「母」兩人待ちや兄弟共武士となり主人を取るべき時節到來雪の中の笥を掘出したる慈悲藏今こそ母が心に叶ふた天晴孝行でかしたく、ろちは最前云ひ付けた通り裏口四方に氣を付けよ合點か「母」ハア、委細承知仕る「母」と睡入る弟「ト慈悲藏納戸の内へ這入る」「母」横藏は池中の箱を取上げて母の御前に差出せば「ト横藏以前の箱を取上げて越路の前に置き平伏する母こそし有て」「母」サア、くろなたにはわけてよい主を取らする則ち主人より下されし装束も改めさせん「母」と去づく、奥の白臺に無紋の上下白小袖傍に三寶九寸五分我子の前に直し置き「ト母以前の白臺を持出づる横藏見て」「母」母者人こりや何じやイヤサ是此白装束は何の爲「母」サ、夫ころは冥途の曠着只今そちが首討て身替りに立てるのじやわや「母」エ、滅相な事斗り此首を身替りとはそりやマア誰が「母」サ、今日そちが主人と頼みし長尾三郎景勝公の御身替り聞及ぶ武田信玄越後の謙信室町の御所に於て互に我子の首討て心底を顯はさんと契約ある由最前そちを召抱へんとて來られし景勝の面体そちが顔にさも似たり扱はと母が推量違はず箱の中へ殘されし此一通に委細の様子詳に記されたり主従となるからと命は君に捧げしもの武士の因

果と諦らめて潔よう死んでくれ「母」コレ、何をいふのじやよう思ふて見やしやれいかに主じやとてまだ知行もくれぬ内に殺さうといふやうな胸慾な主があるものかイヤ、くも、う此主従とんと變改じやく「母」イヤ、ヤさうは成るまい日外諏訪の森に於て殺さるゝそちが命助け置れし景勝公の恩「母」よ、母よもや忘れさせまい其時の情けは今身替りに立てん爲め智謀の畏にかゝりしとは知らざるか恩を知らねば人ではないぞよ譬へ逃げても此家のぐるりの景勝の家來が取巻いて一寸も遁れぬ切腹するか「母」サアそれ、母、但し母が手にかげうか「母」サアそれは「母」サア「母」サア、く返答は何と「母」よ、母「母」と詰かけられ籠中の鳥の目はうるうる、すきを見て逃出す「トうるうるして上手へ逃げ行く」と内より「母」エイ「ト手裏劍打つ横藏へつたりへたる」「母」膝口はつしと手裏劍に尻居にとつさり詮方なく「母」是非に及ばぬもう是迄「母」と腹切刀取るより早く右の眼に突込たり追がの老母も不審顔流るゝ血汐を押拭ひ「ト横藏九寸五分取つて右の目をくり抜いて足に立たる小柄を抜いて手拭にて足を括り手水鉢の傍へ行て中を見ると氷故是れを割つて杓の盛氷を揚げてよく、我顔を見て又手よて眼をさへ思入あつて母の傍へ來て」「母」母者人景勝に似たによつて身替りに立てたがる小面倒な此類に斯う疵付て相好變へればも、う身替りの役には立まい「母」なんと「母」今日唯今父が苗字を繼いで山本勘助「母」晴義「母」

軍法奥義を胸に蓄へ三畧の巻より大切な我命ヤア、謙信の家來直江山城守種綱言聞かす子細あり是れへ出やい、と呼はる聲に、ト間の内、ト横藏急度見得になると上手障子家体の内より慈悲藏着付長上下大小にて出る跡よりお種衣裳襦の形りにて出で上下下に高相引にかゝる、慈直江山城守種綱ふれへ參つて兄者人に對面せん、對面せんと慈悲藏が優美の骨柄長上下爽やかに立出れば跡に續いてお種も俱に立出て、慈某長尾の家臣たる事深く包んで古郷へ歸りし其子細母人には密かに語り兼ねて申受けたる兄者人の一命現在の子を捨てたも否應いはさぬ命の無心去りながら眼をくつて身を全うする大丈夫の魂あつたら勇士を殺すは残念長く謙信に仕へ忠勤を勵まるべし、いはせもあへずあざ笑ひ、愚か、謙信づれが家來には汝等が分相應身が主には釣合はぬ誠山本勘助が崇がむる主人は忝くも足利十三代の公達松壽君是れへ誘ひ申されよ、と詞の下に高阪が妻の唐織治郎吉をかしづき申せば山城親子ハット計りに飛走さり恐入たる計りなり勘助真中にどつかと座し、ト真中へ居直り、横ヤイ山城只今打つたる此手裏劔は先年室町の館にて此公達の御母君賤の方を奪取り立退く折柄景勝目當に打かけたる我小柄只今我手へ儘に落手山本の苗字引起さんと軍學に心を委ぬる處武田信玄大僧正姿をやつし只一人密に庵へ來たらせ給ひ足利の行末覺束なし汝我力と成つて事を計れと名將の一言心魂に徹しハア、畏り奉る

と即座の領承、淨弓矢の誓ひ、母ナ、其時此母も唯人ならんと思ふたが扱は武田信玄公と主従の契約仕やつたのか、横ナ、サ大魚は小池に住ます鶴は枯木に巢をくまます智勇兼備の大將に頼まれ申せし身の面目、淨すぐさま都に駈登り窺ふ時しも館の騒動、横義晴公は敢へなき御最期ハ、ア詮方なし、淨懐胎の賤の方人手には渡さじと忍入て御家の、横白旗諸共守り奉り、淨立退く館は八方に提灯松明散る花の都を跡に遠近の雪の信濃路爰かして月の更科の片山里に、横人知らず匿まふとさしもの母も御存じ有るまい、横ナ、知らなんだ、コレ、さうして御母賤の方の御在所は何國サ、どうじや、横ハ、ア申すも便なき事乍ら憂き事積もる産後の悩み果敢なく此世を、淨去り給ふ跡に残りしあの公達、横勿体なくも我子と偽り次郎吉よ、淨と呼ぶたび、の空恐しさ、横弟嫁が乳を幸ひ我子を捨てさせ養育する我心底我儘無法は一物ありと雪の中の筈を堀つて見よとは天晴明察實に勘助が、淨母人ぞや、横穢れを厭ひ今日迄埋め置たる雪中の筈是に在り、淨箱追取て差上げる源家正統武將の白旗、横神明を頭に頂く義兵の旗揚げ謙信親子只今より此勘助が幕下に付けと立歸て言ひ聞せよ、淨と一ツの眼に天が下見下るす富士の山本勘助三國無双の弓取り母のト間の一卷携へ、母不孝と見せし勘助は却つて父の名を上げる廿四孝に優りし孝器量も揃ふ二人の子供軍法傳授の此一卷頂戴しや、ト一卷勘助へ渡す、淨差置

けば勸助取つて押頂き、ト勸助一巻取つて押頂き思入有つて」横「父の苗字を給はれば勸助が身の規模は立つ母方の氏を繼ぐ弟直江が母への孝行其徳に任せ此一巻は其方に下さる、御恩を忘れず猶此上にも孝行怠る事勿れ 慈「ハア、横「景勝の忠臣は我胸中に徹したれ共心得がたきは親謙信君に弓引く逆心ならば汝も従ふ心や如何に 慈「いふにや及ぶ我子を殺して二君に仕へぬ此山城兄とは云はさぬ敵味方此三畧の恩を仇一ト合戦仕らん 横「サ、さもあらんでかすく我又主君と事ふる甲斐の 淨「天目山に楯籠り 横「出合ふ所は川中島運に乗じて越後の出城諏訪の城迄押寄せ 淨「押寄く 横「さも目覺ましき勝負の遂げん 慈「ホウ潔しく、飯にも一旦景勝に受けたる恩はいかに 横「サ、日月に譬へたる右の眼は越後へ進上二心なき勇士のかため母に與へしかたしの下駄景勝の志捨てるは武士の道ならず 淨「と左りの足にしつかと穿き下り立つ庭の高低も道は歪まぬ弓取の直なる竹の根元よりはつしと切つたる旗竿の「ト横藏駒下駄片足ばさ下へかりて上手の藪の竹を切り折て旗の竿として急度見得して思入有る」横「聖運目出度大將の 母「誘ふはかしこき御笑顔 横「眠れる花の死顔も 横「抱いてゆふつてすかしても 慈「返らぬ昔唐土の 横「廿四孝はまのあたり 母「孟宗竹の笋は 横「雪と消行行く胸の中 慈「氷の上の魚を取り 横「それは王祥 横「是は他生の 皆「縁と縁 淨「黄金の釜より進ひ難き其子賢を切離す弟が慈悲藏胸慈と兄が不孝の

孝行の我日の本に一人りの勇士今に名高き山本氏武田の家の礎と事蹟を世々に残しける「ト横藏旗を持ち六法踏んで皆々入替つて横藏半舞臺真中にて急度見得段切にて幕

大詰

狐種火の場

役名

一花 作 り 簀 作	一白 須 賀 六 郎
實 之 武 田 勝 頼	一原 小 文 治
一八 重 垣 姫	一二 の 股 六 郎
一腰 元 滯 衣	一腰 元 四 人
一長 尾 謙 信	一上下 侍 四 人
一長 尾 景 勝	一軍 兵 大 勢
一花 守 關 兵 衛	
實 は 齋 藤 道 三	

造物一面の高二重真中御簾揚下ろし見附金襖上下塗骨障子家体右二重に濡衣腰元の拵へにて外に六人居並び琴歌にて幕明く 淨「愛も切取る諏訪の城新たに建る奥御殿は義晴公の御

幼君後室手弱女御前俱に設けの結構は大方ならず見得にけり急がし中に腰元婢一ツ所に寄  
 集り「ト琴歌の相方引流し」○「何と皆の衆去年からの御普請で結構に建つた奥御殿は武將  
 様とやらの後室様のお成りじやといふア」△「さうかいなア私しや又そんな事といしらす此  
 お館のお姫様八重垣様に聲様が来るので御祝言の支度をするのじやと思ふて居たわいなア  
 □「お花殿のいはしやんす事わいのお姫様にお言号の有つた勝頼様は去年の秋御切腹被成  
 たとの事じやわいなア」○「夫で其勝頼様のお姿を繪に寫し明ても暮ても泣いて斗りお出遊  
 ばすのがそなたの目には掛らぬわいのう」□「今日のお拵へは今日日本の大將軍のお子様あり  
 其後室様世の常のお客とは違ふわいの」×「夫故此間より國々の名物をお求め被成るれど今  
 此諏訪の湖に氷が張詰め船の往來も叶はぬ故何かいさついで手支へと役人衆の心遣ひ」○「夫  
 故はれなお客様念に念を入れて無調法のない様にどの言付新参とい言乍ら物馴れた濡衣殿  
 何かの事を頼むぞへ私にも教へて下さんせ頼むぞへよいかや〜是皆さん頼んで置かしや  
 んせいなア」△「是は又人を術ながらす様に物馴れたやら馴れんやら今参りの私お前さん方  
 に引廻して貰はにや成り升せぬ」×「濡衣殿のァノべんちやらわいのホ、ホ、」△「傍輩中の  
 おれそれもお能く見ゆる中庭より息せき出る簀作が襟先に小腰を屈がめ」△「簀作、ハイ仰付ら  
 れ升た奥庭の花壇の菊屈がむを延し延るを締め枯葉一枚ない様に残らす手入仕り升てムリ

升る」△「いふ顔うつとり妬お花」△「皆さん御覽被成たかアモ見事なよい男こんな男に手入  
 せらるゝ菊の花はあやかりの私もお前に手入して貰ふて小菊が咲して見たいわいの是前  
 髪様一寸こちら向いて見せや本によい男じやなア」○「是こしたりはしたかいそんな事いふ  
 て居る間に御用がおくれる」□「ど斯う云ふ内後室様のお成りで有らう」×「サアお花殿ムん  
 せ」△「私しやァノ前髪様に」□「ハテマアムんせいなア」△「今行くわいなア」△「びんしやん  
 として入りにける濡衣跡を見廻して」△「勝頼様」△「ト押へる管絃に成り濡衣こなし有  
 て下へ下り簀作と入替り兩人邊りを見廻し簀作上手に相引に懸り濡衣下座に手をつかへ」  
 △「あなたにお別れ申てより此館へ入込み程ふる日敷の明暮もどうお暮し遊ばすとお案じ  
 申て居り升内思ひも寄らす菊作りと成て此館へお出遊ばされし勝頼様御思案でも有つての  
 事か」△「ホ、不審尤此家の主じ長尾謙信一子景勝を討つて出さず剩さへ義晴公の忘れがた  
 み松壽君御母公諸共今日此館へ招く段心得難く思ひし故菊作りと成つて入込む某汝が役目  
 は法性の兜いまだ取得る便りなきや濡衣如何に」△「と有りければ」△「其兜の事故に御奉公  
 に参つた私微塵も油断は致さね共何を云ふても用心厳しく夫故心に任せねぞお悦び遊し升  
 せ今日のもてなしと有つて其兜を上段に飾らしてムリ升れば今日を過さずお手に入れて差  
 上げ申せう」△「すりや其兜が奥の間に」△「ア、モシ、」△「指寄つて呷さうなづく折柄に」△「ト



を討つべしと契約有りしは諸大名満座の中今に於て其沙汰なく剩へ本國に引籠り底の知れざる親人の所存イヤサ謙信の心底と人の疑ひ立申せなせさつぱりと拙者の首がイヤサ倅景勝の首討つて心底は見せられぬサア首討つて渡さるゝや 謙サア其儀は 景御前に於て切腹するか 謙サア 景サア 兩人「サア」 景返答が承りたい 謙と詰寄れば道が名を得し謙信も倅を倅が討手の上使口をつぐんで見へにけり 景ヤア未練の心底此上は某爰にて切腹致さん 謙と差添に手を懸れば「ト下手の内にて」 謙ヤレ暫らく 必ず共に早まらつしやるか 謙と聲を懸けて花守關兵衛何うは知らず白菊の花携さへて立出れば「ト關兵衛出で来る景勝見て」 景ヤア汝等如きの知る事ならずさうおらう 謙と景勝の怒りにちつ共憶せぬ關兵衛 關イヤ下として上の事差出るではムリ升せねど最前よりあれにて様子承ればどうやら斯うみいら取がみいらに成りさうな御上使あつたらし侍の首切つて仕舞へば再び生らぬ又此花は何ば切つても生らるゝ切て生るといふ傳授お望ならばハイ 差上げたう存じ升る 謙ととこやら詞の一理屈聞て謙信眉をしばめ 謙ム、切つて生けるといふ白菊面白し 關兵衛其花所望せん 關成程花は上げ升せうが望斗りでは自由に生られぬ夫を生すは花作り幸ひか次に居り升れば是へ呼寄せ俱々生る傳授を御覽じ升せ ○「ト下座に向ひ」 關「コレ花作りの簀作御用が有るちやつと来い」 「ト此時下座にて」

簀作「ハイ」 只今参り升る 謙中庭より息せきと「ト簀作出て」 簀けた、ましい何の御用でムリ升る 關何の御用とは爰のお大將様が貴様に頼みたい用事がある ○ハイ 則是がお咄申た花作りでムリ升る 謙ム、スリヤ其方が ○「ト簀作を見て」 謙ヤ、汝は武田勝頼 關ア、申夫おつしやつては曲がない何も知らぬ白菊の花其生け様を覺へた此花作り人の振見て我振直すが第一の傳授事ナ是さへ御所望被成るれば何も角もさつぱりと申譯の立ちさうなものと憚り乍ら親仁めは存じ升る 謙ホ、ウ天晴の花作り今より館に召抱んがそちや謙信に奉公し花の生け様傳授致して呉れるじや迄 謙ハイ外の事は存じ升ねど花一まきの事なれば生さうと殺さうと私が得物夫を取得にお抱へ被成て下されうなれば有難う存じ升る 謙早速の承知先は満足御上使への御返答申上るはアノ簀作先づ夫迄は暫時の御猶豫偏に願ひ奉る 謙と餘儀なき頼みに打點き 景火急の御上意用捨は成ねど盤尻峠に扣へ居る諸大名へ申渡す子細も有れば我は彼所へ立越へん有無の返事は盤尻迄際取らば直に此城取囲まん 謙追付け有無の御返答認る内簀作は次へ参つて衣服大小 謙ハア、 謙然らば御上使様 景返答相待申 謙と勇む簀作景勝はにがり切つたる盤尻へ別れてこそは出て行跡見送つて關兵衛は「ト合方に成り」 關花作りの簀作合点の行かぬと存せしがらんならあれが 謙疑ひもなき武田勝頼夫と見出せし花守關兵衛下郎に似合はぬ中々器量の有る親



仁其性根を見込み改めて謙信が頼入れ度子細有り 關「是は又改つたお詞元狩人の私お見出しに預つた君の大恩假命令の御用でも否と申さぬ我等が魂 謙「ホ、頼母し、く其詞を聞く上は何をか包まん汝に見する品ころわれ〇ソレ者共 近習「ハッ 謙信が指圖に立つて一ト間の襖開けば内に怪しき牢與關兵衛不思議と指覗き 關「牢の内には科人らしき者も見へず何やら見馴れぬ替つた物アリヤマア何でムリ升る 謙「未だ日本へ渡らざれば汝等が知らぬは理り是こそ鉄炮と名付し飛道具 關「ム、其又鉄炮とやらが盗でも致し升たか何の科でアノ牢へは 謙「其子細語つて聞さんさいつ頃武將の御前へ薩州種ヶ島の浪人井上新左衛門と名乗り此鉄炮を献上し類なき軍器の重寶遣ひ様の傳授せんと欺し寄つて義晴公を一討に跡を暗まし其場を逐電草を分つて尋ね捜せど今に於て行方知れず詮議の手筋は此鉄炮其所に残り有りし則科人同前なれば斯の如く禁牢させ日毎の拷問手を盡せど義晴公を討つた敵今日迄白状せざる不敵の鉄炮只今より此詮議汝に申付る間水火を以て責さいかみ敵の有家を白状させよソレ 謙「と上意の下より近習の侍件の一ト品取出し關兵衛が前に差出せば手に取上げて呆れ顔 關「スリヤ私にお頼み有るは此鉄炮を責いでムリ升るか是は又思ひも寄らぬ拷問も問状もなみくの人間なら及ばず乍ら責も致さうさせるやの看板か唐の火吹竹見る様も物責めいとは御難題おなた方の手にさへ合ぬ物其上何を證據何を手懸りに

謙「ナ、手懸り證據は其鉄砲の遣ひ様普く世上に知る者なし其傳授を覺へし者が 關「ム、スリヤ何と御意被成れ升此鉄砲の遣ひ様を覺へた者が 謙「則武將を討つたる敵 關「スリヤどうでも詮議を私に 謙「仕損じまじき汝が魂 關「アノ親仁が性根玉を 謙「見込んで頼む違背は有るまじ油断致すな花守關兵衛 關「エ、 謙「急度申渡したぞ 謙「詞も重き大將の心残して「ト管絃に成り謙信奥へ這入る「關「ア、モシ、我等風情にこんな役目難題も事による外へ仰付られて下さり升せ申し、 謙「と跡を詠めて 關「いまだ日本へ渡らぬ鉄砲遣ひ様を覺へし者が義晴公を討つたる敵此關兵衛に詮議せよとこゝ、合点の行かぬ 謙「と諸手を組んで工夫の顔色 關「ア、イヤ、どう思案して見ても我等には似合はぬ役目やつぱり似合ふた花の番鳥嚇しの弓矢外に何にも白髪の子親仁ドノ小家へ往て一休みしやうかい 謙「と振かたげたる鉄砲も胸に一物有明の月もる「ト此淨るりにて鉄砲を持ちこなし有て送りにて下手へ這入る直ぐに出語り成り「謙「臥所へころは行水の流れと人の簑作が姿見かはす長上下悠々として一ト間を立出、 謙「我民間に育ち人よ面を見知られぬを幸ひに花作りと成つて入込みまは幼君の御身の上に若し過やあらんかと餘所乍ら守護する某夫と悟つてかへしやハテ 謙「合点の行ぬと差俯む思案に塞がる一ト間には館の娘八重垣姫言号有る勝頼の切腹有りし其日より一ト間所に引籠り床に繪姿掛巻くも御經讀誦りんの音「ト

上手障子を明ける内に八重垣姫床の間に掛地を掛け經机を置き讀誦して居る」淨「こなたも同じ松虫の鳴音に袖も濡衣が今日命日を弔らひの位牌に向ひ手を合せ」ト下手障子を明る内に濡衣經机に位牌を置き鉦を叩いて居る」彌「廣い世界も誰有つてお前の忌日命日を弔ふ人も情けなや父御の悪事も露知らずお果被成たお心を思ひ出す程かいとしい塵や未來は迷ふてムらう女房の濡衣が心斗の此手向千部萬部のお經ぞと思ふて成佛して下さんせ南無阿彌陀佛」彌「誠に今日は霜月廿日我身替りに相果てし勝頼が命日暮行月日も一ト年餘り南無幽靈出離生死頓生菩提」八重「申勝頼様親と親との言号有りし様子を聞くよりも興入するを待兼てお前の姿を繪に書し見れば見る程美しいこんな殿御と添臥しの」淨「身は姫御せの果報ぞと月よも花にも楽しみは繪像の傍で十種香の煙りも香花と成たるか回向せう逆み姿を繪には書しはせぬ物を魂返す反魂香名畫の力も有るならば可愛とたつた一言のお聲が聞たい」ト繪像の傍に身を打ふし泣涕こがれ見へ給ふ」彌「あの泣聲は八重垣姫よな我名を呼びし勝頼を誠の夫トと思ひ込み弔ふ姫と弔ふ濡衣」淨「不便ともいぢらし共いはん方なき二人りが心ろゝる涙にくれけるが」彌「我乍ら不覺の涙」淨「袴かき合せ立上る後ろにしよんばり濡衣が」彌「ア簀作様合点の行かぬあなたのお姿どうした事で此様に」彌「ホ、ウ不審尤も斗らずも謙信にかへられたる衣服大小」彌「アモ扱も衣紋付から大小の召し様迄

似たとは愚かやつぱり其儘篋ころ今は仇なれ是なくば」淨「忘るゝ事も有りなんとよみ玄別れを悲しむ歎き我夫マに微塵變らぬ此お姿見るに付けても忘られぬ」彌「私しや輪回到迷ふたさうな」彌「お赦されてと伏沈む泣聲洩れて一ト間には不審立聞八重垣姫うつと襖の透間洩る姿見紛ふ方もなくヤア我夫マか」八「勝頼様か」淨「と飛立つ心押静め正しうお果被成れしもの似たと思ふは心の迷ひ繪像の手前も耻しいと立戻つて手を合せ御經讀誦のりんの音勝頼公は濡衣が心を察し聲曇り」彌「果敢なき女の心から歎くは理り去り乍ら定めなき世と諦めよ」淨「勇むる詞こなたには心空成る其人の若しや長らへおはすかと思へば戀しく懐かしく又覗いては繪姿に見比べる程生寫し似はせでやつぱりはん」の勝頼様じやないかいのと思はず一間を走り出縫り付て泣給へば」ト思へどさあらぬ風情」彌「ユハ思ひ寄らざる御仰せ我等簀作と申花作りよう」ト只今召抱へられ衣服大小改めし新参者勝頼とは覺へなし御鹿相有るな」淨「と突放せば」八「何といやる今父上に抱へられし新参者花作りの簀作とや自とした事が餘りよう似た面さし故若しや夫かど心の煩惱二人りの手前」淨「耻かし乍ら」八「是濡衣此簀作とやらいふ人ろなたは遠から近付か」彌「エ、ハ、イ、ヤイのう知る人で有らうがの」彌「アノお姫様とした事がたつた今見べたお人何のマア私が」八「イヤ隠しやんな今の素振忍ぶ戀路といふ様な」淨「可愛らしい中かいのと思ひも寄らぬ詞に悔り」彌「

チ、お姫様おつしやる事わいの人にこそ寄れ何のあなたに勿体ない ハム、勿体ないとい  
 やるからはどうでもそなたの知るべの人か 馬「イヤさうではなけれ共大事のお主の目を掠  
 め忍び男を拵へるは勿体ないと申事でムリ升る ハ「フムすりや知るべの人でなく殿御でも  
 ない人ならどうぞ今から自を可愛がつてたもる様に押附乍ら媒を 海「頼むは濡衣様々と夕  
 日まばゆく顔に袖あてやかなりし其風情 馬「チ、お姫様とした事がまだお子達と思の外大  
 それたあの簀作殿を ハ「サア見初めた戀路の始め後共いはす今爰で 馬「媒せいと仰せある  
 のか我をれ本にお大名のお娘御連油断はならぬ戀の道品に寄つたらお取持致し升せうが  
 妻「アイヤ是濡衣必ず鹿相をいふまいぞ 馬「サア何も角も私が吞込でナ吞込でお取持致すま  
 いものでもないが眞實底から簀作殿に御執心でムリ升るかへ 海「問はれて猶も赤らむ顔傾  
 城の身はイヤ知らず姫御せのあられもない殿御に惚れたといふ事が腔偽りにいはれう  
 馬「其お詞に違ひなくば何ぞ慥な誓紙の證據夫見た上でお媒 ハ「チ、夫こそ心易い事其誓紙  
 さへ書いたならば 馬「イエ、夫もこつちに望みがある私が望む誓紙といふは諏訪法性の  
 御兜夫が盗んで貰ひたい ハ「ヤア何といやる諏訪法性の御兜を盗み出せといやるからは扱  
 はあなたが勝頼様 海「いふ口押へて 妻「ハテ滅相な勝頼呼はり微塵覺へのちい簀作鹿忍ば  
 し宣給ふな 海「いふ顔つくつく打守り言身斗りにて枕かはさぬ妹脊中お包みは無理ならぬ

と同日羽色の鳥遊人目に夫と分らねと親と呼び又夫マ鳥と呼ぶは生ある習ひぞや如何にか  
 顔が似たれば連戀ぞと思ふ勝頼様そも見紛ふてあられうか世にも人にも忍ぶなる御身の上  
 といひ乍ら連添ふ私に何遠慮ついううくとお身の上明かして得心さしてたべ夫も叶はぬ  
 事ならばいつを殺してくと紐り付たる恨泣勝頼態と聲荒らげ 妻「ヤア聞分なき戯れ言如  
 何程に宣給ふ共覺へなき身は下主下郎餘所の見る目も憚りありうて退き給へ 海「と突放せ  
 ば ハ「スリヤ此様に申ても勝頼様ではおはさぬかハア 海「ハット斗りよ簀作が差添逆手に  
 取り給へばおは御短慮と止むる濡衣 馬「マア、お待被成升せ ハ「イヤ放して殺してたも  
 勝頼様でもない人に戯れ事の耻かしや心の穢れ繪像に言譯どうも生ては居られぬわいのう  
 海「又取直すを押止め 馬「マア、お待遊むし升せ遣は武家のお姫様通れの御志し其御心を  
 見るからには勝頼様にお逢はせ申升せうソソそこにムる簀作様が御推量に違はぬ誠の勝頼  
 様ちやつとお逢ひ被成升せ 海「と突やられては遣にも始めの恨み百分一聞へ升せぬが精一  
 ばい跡は詞もなき折柄父謙信の聲として 謙信「簀作は何れに居る盪尻への返事時刻が移る  
 早參れ 海「立出ればハット簀作は飛しさり 妻「お支度よくば直様參上 謙信「委細の事は此券  
 箱に片時も早く罷越せ 妻「ハア畏てムリ升る 海「ハット領掌券箱携へ盪尻指て急ぎ行く謙  
 信跡を見送つて 謙「ヤア、者共用意よくば早來れ 六「ハア、海「ハット答へて白須賀

六郎原小文治譜代の郎黨御前に出て来る謙信勇んで御聲高く「今此諏訪の湖に氷閉れば渡海叶はず盪尻迄は陸路の切所油断して不覺を取るな」六郎「ハア仰せにや及ぶべき」兼て内意を受たる我「直様是より馳向ひ地の理を計つて討取る手立」小文治「仮令如何程働く其前後を包んで袋の鼠」六「變に應じ機に臨み討取らん事」兼「手裏に在り」小「追付け吉左右お知らせ申さん」六「か心安かれ」二人「我君様」兼「さも勇ましく言上す」兼「ナ、出かした急げ」二人「ハアお去らば」兼「勇み進んで駈り行」ト兩人打込みになり逸散に向ふへ走り這入る「跡に不審は八重垣姫」八「申父上事々しい今の有様何事でムリ升るへ」兼「ホ、ウあれころは武田勝頼討手の人数」八「何勝頼様を討手とな」兼「スリヤア何故でムリ升る」兼「諏訪法性の兜を盗出さんうぬらが工み物蔭にて開居たる故勝頼に使者を言付け歸りを待つて討取らさんと示し合せま討手の手配り」八「エ、ろんなら今の討手の者は」兼「勝頼様を殺さん爲かお姫様」八「ハア」兼「はつと斗りにどうと伏し」八「今日は如何なる事なれば過去り給ひま我夫々に再び出逢ふは優曇華と悦んで居たものを又も別れになる事は何の因果ぞ報いぞいなア」兼「情けなや父のお慈悲にお命をどうぞ助けて給はれとくぞき歎くよ目もやらず」兼「ヤア武田方の廻し者憎き女めうぬにはまだ尋ぬる子細有り奥へうせう」兼「小腕取り情け用捨も荒氣の大將張臺深く入り給ふ」ト此件宜しく早舞にて返し

造物奥庭の遠見上手に詠への池此上手に二重家体床の間に兜を飾りあり舞臺真中に柴垣音樂にて道具留る「ト橋掛りより六郎好みの拵らへにて窺ひ出て」六郎「難なく忍び入つたる上杉の館借に此奥庭の高座敷に飾り置たる諏訪法性の兜取得呉よと御主人の仰せ役目を蒙る二の股六郎今宵は過ぎすナ、さうじや」ト六郎柴垣へ忍ぶ是にて口上宜敷有つて這入る是より狐火の淨るりに成る」兼「思ひよやこがれて燃る野邊の狐火小夜更けて狐火や狐火野邊の野邊の狐火小夜更けて幾重洩れ来る爪音は君をまうけの奥御殿こなたは正体涙乍ら」八「アレアノ奥の間で檢校が諷ふ唱歌も今身の上おいとしいは勝頼様斯る工みの有るぞ共知らず計らぬお身の上別れとなるもつれない父上諫めても歎いても聞入もなき胴慾心娘不便と思すから」兼「お命助けて添はせてたべと身を打伏して歎きしが」八「イヤ」泣ては居られぬ所追手の者より先へ廻り勝頼様に此事をお知らせ申が近道諏訪の湖舟人に渡り頼まん」兼「急がんと小褌とる手も甲斐なく敷駈け出せしが」八「イヤ」今湖に氷張詰め舟の行來も叶はぬ由歩路を往て、女の足何と追手に追付かれう知すにも知されず見すく夫トを見殺しにするは如何なる身の因果ア、翅がほしい羽がほしい、兼「飛んで行きたい知らせたい逢ひたい見たい夫マ乞の千々に乱る、憂思ひ千年百年泣飽し涙に命絶れば逆夫マの爲には餘もさるまじ此上頼む神佛」兼「床に祭りし法性の兜の前に手を支へ此兜は諏訪明神

より武田家へ授け給へる御寶なればとりもなをさす諏訪の御神勝頼様の今の御難儀助け給へ救ひ給へ 淨「兜を取て押戴き押戴きし佛の若しやは人の咎めんと窺ひおる飛石傳ひ」ト此淨るりにて姫兜を取つて戴きそつと平舞臺へおる 淨「庭の溜りの泉水に映る月影怪しき姿ハット驚き飛退きまが ハ「今のは慥に狐の姿此泉水に移しはハテ面妖な 淨「どきつく胸を撫下しこわく乍らろろくと差覗く池水に映るは巳が影斗り ハ「たつた今此水に映つた影は狐の姿今又見れば我佛幻といふものか但しは迷ひの空目とやら 淨「ハテ怪しやとどつといつ兜をそつと手に捧げ覗けは又も白狐の形ち水に有りく有明月不思議に胸も満り江の池の汀にさつくりと詠め入つて居たりしが ハ「誠や當國諏訪明神は狐を以て使はしめと聞つるが明神の神跡に等しき兜あれば八百八狐附添ふて守護する奇瑞に疑ひなし、夫よ思ひ出したり湖に氷張詰れば渡りそめそる神の狐其足跡を知るべにて心安う行來う人馬狐渡らぬ其先に渡れば水に溺るゝとは人も知つたる諏訪の湖 淨「假令狐は渡らずとも夫トを思ふ念力に神の力の加はる兜勝頼様に返せとある諏訪明神の御教へ ハ「ハア、忝ぢや有難や 淨「兜を取つて頭にかつけば忽ち姿狐火の爰に燃立かしてに乱るゝ姿は法性の兜を守護する不思議の有様飛が如くに「ト八重垣姫向ふへ這入る花道にて本鉄砲の音する 淨「こあたの間には手羽女御前始終の様子窺ふ共いさ白菊の花の番小家にとつくと關兵

衛が付廻しても神通力花のまに／＼見へつ隠れつ神さる狐返し  
造物元へ戻る關兵衛出て來る上下より捕手四人取巻立廻り有つて逃げて這入る跡に關兵衛見得に成る 景勝「ヤア／＼美濃の國の住人齋藤道三暫らく待て 關兵衛「ヤア訝かしや三十年來跡をくらし包み隠せし我本名齋藤道三と呼びたるはそも何やつぞ對面せん 淨「對面せんと呼はつたり景勝前を打圍ひ逃げば切らんと詰懸くる後ろの襖さつと明け武田四郎勝頼 淨「悠然として立出れば 關「ヤア長尾謙信の此城へ日頃不和なる武田の子息勝頼のさばり來るも心得ず叛逆人の詮議とハ 勝「ホ、ウ匹夫下郎の分として天下に仇する汝こそ合点行すと窺ふ所最前打つたる鉄砲の術を覺へし者は汝一人我と我身の白狀明白あらがふな齋藤道三 淨「大地を見抜きし詞の石火矢さめ付ればはく／＼と打點頭き 關「ホ、ウ道は武田四郎勝頼よくも見付けた我先祖道親は謙信の先祖上杉が鎗先にかゝつて死んだる恨みの元は足利の武將便つて殺さん其爲に北條氏時に賄し心を合せ安々と義晴は討つたれども忘がたみの松壽丸けふ此館へ來るは幸ひ奪取つて人質とし謙信信玄氏時をも皆殺し一天四海を掌握する此道三汝等が手にはいつかな／＼義晴を討し鉄砲で手羽女御前もふち殺した松壽丸を是へ出して降参せい 景「ホ、ウ根強く仕込みし謀叛人斯る危き敵の中へ足利の公達がうか／＼と來り給はんや 勝「最前鉄砲にて打れ給ふたをやめ御前の御死骸とくと拜見仕れ

澤「投出す女の切首追取つてよく見れば 幽「ヤアコリヤ娘濡衣の 澤「エ、口惜しや奇ッ怪や  
 數十年の鬱憤を一時に散せんと思ひしに勝頼が恩に引かれて敵方へ巻込まれ大望ある此親  
 によくも不覺を取らせしな 澤「につくき女が死に様やと首を打付け齒ぎしみ齒切りうぐ  
 涙は諏訪の海一度にとくる如くなり 勝「ヤア返らぬ縁言絶体絶命 景「尋常に繩に掛れ 澤「  
 兩人一度に立懸る 幽「シヤ道三が死物狂ひ 澤「立上る弓手の脇坪はつしと射る白羽の矢先  
 は長尾謙信威風烈しき眼中に道三とつかと座を組んで 〔ト奥より謙信出て来る關兵衛とか  
 り矢を引抜き腹へ突込み 幽「先祖より遺恨有る上杉が子孫謙信の矢先に懸るは我運命尽る  
 所本國を切取られ美濃一ツだになかりし無念美濃尾張兩國を従へ終には國家を握らんと思  
 ひしが我身の終りと成つたるか及ばぬ望みも足利の武將を討つたる天罰信玄謙信中惡敷見  
 せ掛しも我を見出す計略とは今迄知らざる心の淺はか最後に魂改る此世の餞別北條が城郭  
 の案内は某具さに傳へ申さん元來相州小田原の城堀深うして塀高く要害一の名城なればた  
 やすくは落つべからず 澤「霞晴れたる時節を窺ひ箱根山より見下せば敵地の構へよく知る  
 べし 景「其時謙信が家の軍法細作の犬を入置て後より 景「此景勝も切つて出て放火を相  
 圖に甲斐越後諸軍一度に矢先を揃へ指詰引詰射るならば 勝「さしも堅固の城なり共直に乗  
 取り氏時が首を巻に晒して見せん 幽「夫こそは道三が死後の思ひ出何れも去らば 三「去

らばく 〔ト道三落入る賑やかなる鳴物に成る〕 澤「甲斐と越後の兩將と其名を今に残しけ  
 る 〔ト各々宜敷幕〕

明治廿七年九月廿二日印刷  
明治廿七年九月廿八日發行

(定價金拾五錢)

大阪市東區備後町四丁目四十番屋敷

兼著作者  
兼發行者

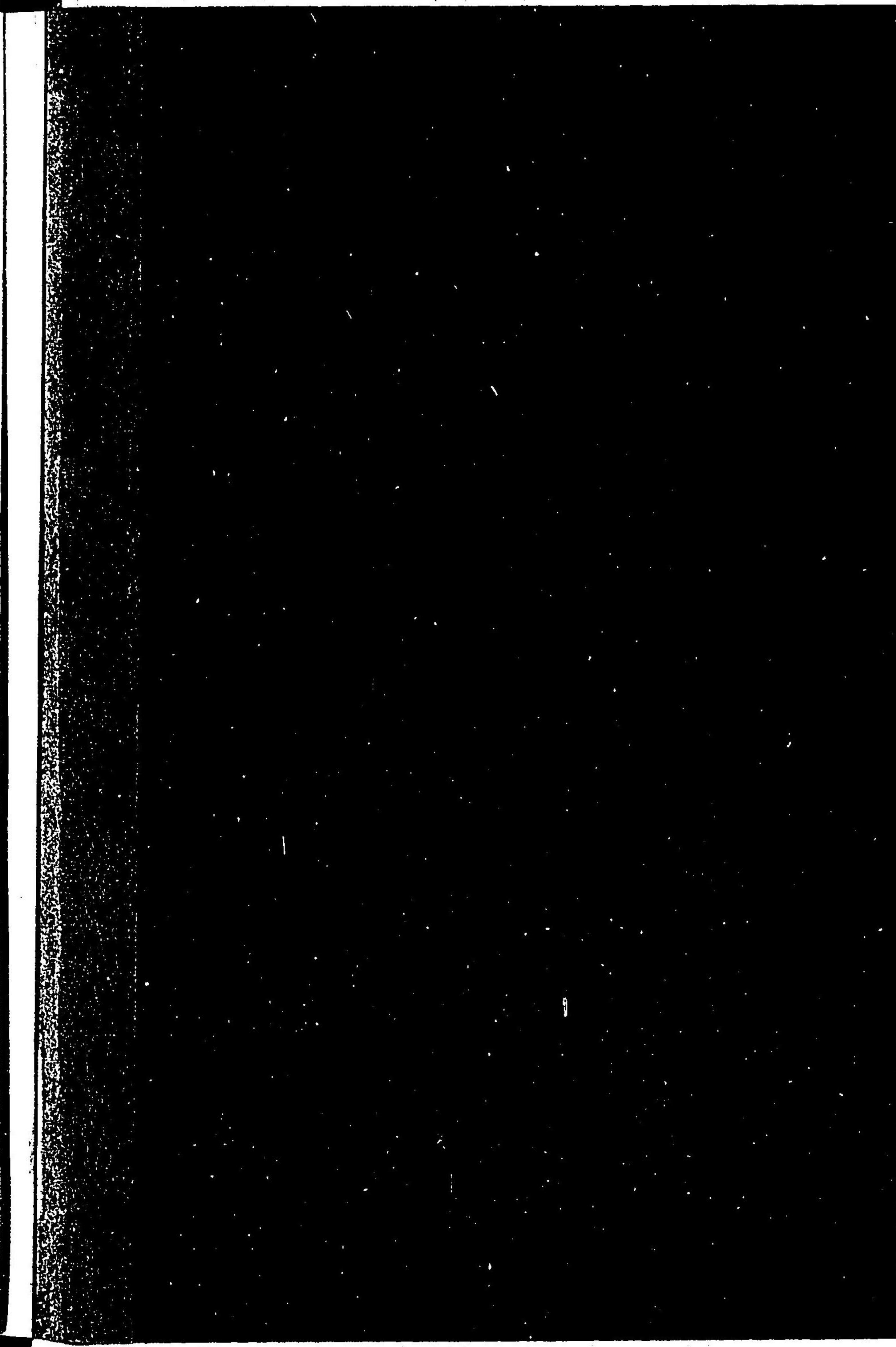
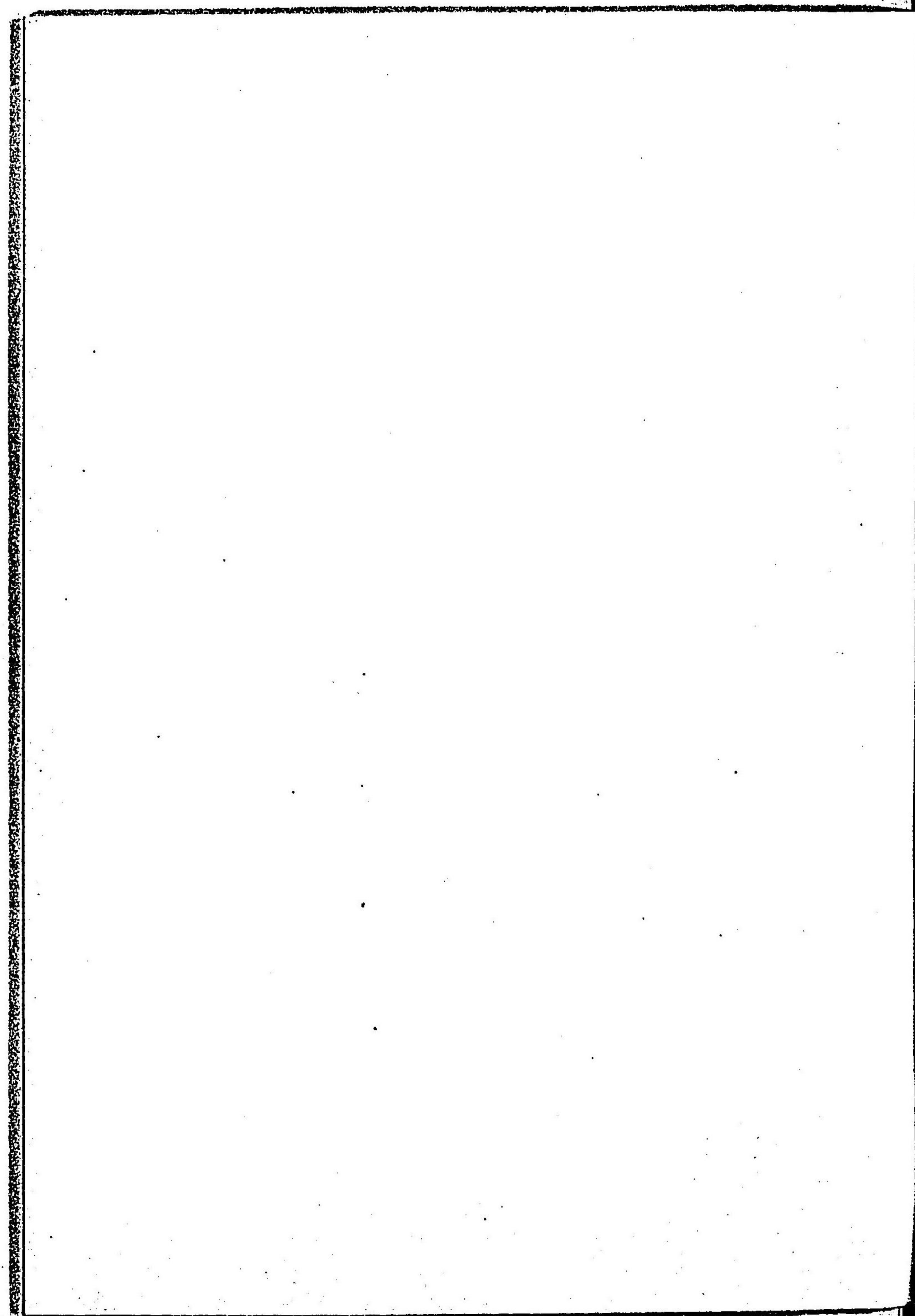
中西貞行

大阪市東區內本町橋詰町六十八番屋敷

印刷者

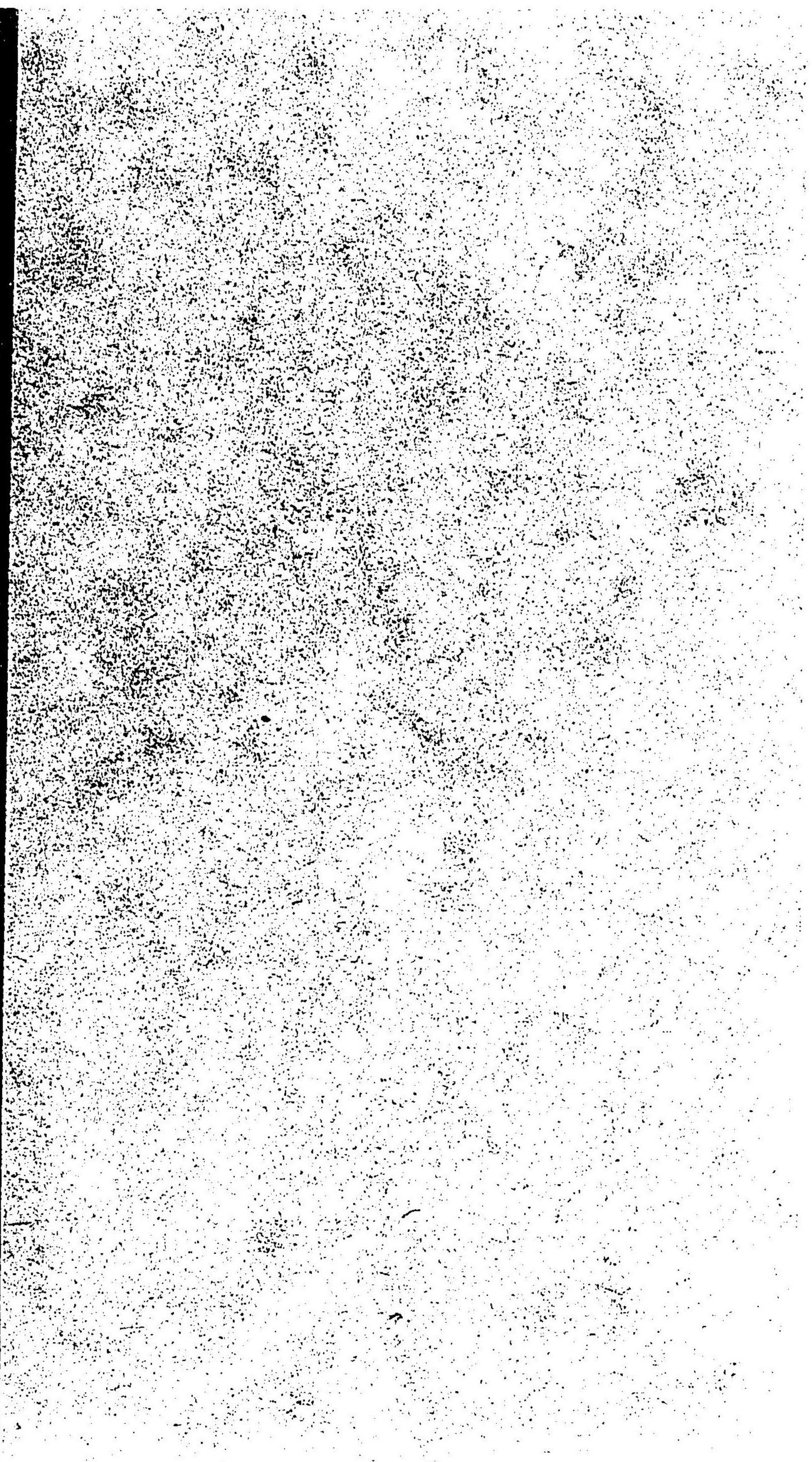
前田菊松

版權及發行所  
版權興行所有





1950



特51

674

演劇脚本 本朝廿四孝

国立国会図書館

088756-000-1

特51-674

本朝廿四孝

中西 貞行/著

M27

DBJ-0415

